

大祓祝詞解義

第三文明會  
皇學研究所

# 大祓祝詞解義

小笠原 孝次

大祓祝詞の作成年代は不詳であるが、神武天皇の頃既に用いられて居り、最後に楠本入磨の修辭によつて今日見る如き美文の体裁と成つたと伝へられる。竹内文献・阿部文献等によると、その昔神代の鶴宮誓不合朝三十八代天津太孫詞子天皇がその大祓の作成者であつたと伝へられてゐる。その年代は正確には判らないが、神武紀元前千年程のことと推定される。

白鳥聖書トイラの律法レヒとして出埃及記・利未記に大祓祝詞の一部の詳細な解説が載つてゐる。大祓の意味が判らないところは聖書を讀めば判るやうになつてゐる。イスラエルの予言者モーセが素朝當學したのは鶴宮誓不合朝六十九代神足御尊天皇の御宇であつて、當時すでに日本の朝廷は大祓祝詞が行はれてゐたから、モーセは所謂ヘブライの三種の神宝を授かり、彼がイスラエルの民を養つたと言はれるマナ・マロニロである言葉を放つたと同時に、神道の經典の一つである大祓を學んで行つた。この事は神道とキリスト教、ユダヤ教・マホメット教との関連を明かにし、またモーセが日本へ来て神

道を學んだと云ふことの証拠であると共には、大祓祝詞が既に存在してゐた年代を知り一つ々よすがでもある。この事に就てはいつれ後述する。

大祓祝詞の内容として何が述べられてゐるか云ふと

(一) 日本肇國の歴史

(二) 肇國の形而上的原理、すなはち日本國體原理

(三) 天孫降臨以後、特に神武維新以後、佛教の所謂正法が隠没して佛法末法の時代に入つた時、世界に出現して来る矛盾・混亂・顛倒・罪穢の意義に就ての形而上・形而下の解説

(四) 歴史が降下した末法時代の究極に於て、人類が顛倒夢想を離脱し、罪穢を淨化し、世界の禍害を根絶して、元の神代ながらの平和な正法の世界に還るための操作、すなはち今日まで佛陀の出現繁下生、キリストの再臨、天の岩戸開き、天孫降臨等々と予告されて来た事態を實施するための処置法

(五) その来るべき正法時代に於ける世界文明の經營方法

等の広汎な内容が簡潔な美文を以て、まことに要領よく述べられてゐるのである。

すなはち大祓は四千年前すでに世界が今日の事態に到達すべき事を予定して、その処置法を稿が未だ現はれぬ時代から、咒文の形式を以て教へてゐる皇祖天皇天津日嗣の經綸の予定書であり、その指

儀書の一つである。日本人はこの神代の天津日嗣の勅語の形を以てする言、或は企画、予定書とこの長年月を通じて、朝野共に護持誦唱しながら今日に及んだ。大祓祝詞の原文を叙いて、その予告と原理を實施して、これによつて神代以後に興隆した人類の第二文明である物質科学文明を指導し、これに生命的意義をあらしめて、以て物心、主客、靈肉両般に亘る層面補車の文明を完成しなればならぬ時が現在である。

大祓の儀式については大空令の神祕令に「凡そ六月、十二月晦日の大祓は東西（大和、河内）の文部、祓刀を上り、祓詞を讀む、百官男女を被所に聚集し、中臣祓詞を宣り、卜部解除を爲す」とある。延喜式によると此の時「御麻」荒世、和世「宣」等の「御禊」の儀が行はれ、その時宜陽殿の南頭にて奏せられる宣命が即ち大祓祝詞である。

現今神社神道や宗派神道に於ては神前で神官が神を對象として奏上する形式で用ひられてゐるが、これは佛教の誦經の形に擬らへたものと云へよう。本来大祓は天皇から百官人民に發布された勅令であつて。思へない神を相争はして人民が祈禱する言葉ではなく、天津日嗣から國民に向つて發布された指令であり、予告である。

本冊子は大祓祝詞講義の概要であつて、大祓の正確詳細な実践は

古事記の「楔板」であるから、そのためには是非とも言葉百神の原理を理解得ることが必須である。その講義を理解するためには併せて本会発行の「第三文明への通路」及び「古事解義言葉百神」を閱讀されて、天津日嗣の世界経綸の正史とその経綸の原理すなはち言葉百神三種の神器の法理を把握することが前提であることと申添えて置く。

みなつま つごしり  
六月 晦日 大祓

集侍はれる、親王、諸王、諸臣、百官人達諸閣召せと宣る。天皇が朝廷に仕へ奉る、比禮挂くる伴男、手被挂くる伴男、劔負ひ伴男、劔佩く伴男、伴男の八十伴男を始めて、官々に仕へ奉る人達の、過ち犯しけむ難の罪を、今年の六月晦の大祓に、祓ひ給ひ清め給ふ事を、諸閣召せと宣る

これは大祓の序文である。「皇は神にてませは天雲の箇の上にはほりするがも」と万葉に詠まれてゐる天皇は布斗麻通をアオウエイまたはアイウエオと並べる觀念の上で「ア」の位に在し、アは「阿字不生」と云はれ、「南無阿彌陀佛」であり、神であり、佛である。その下に四伴男（長官）がある。

「比礼」とは言葉五十音とあらはした神代の神名文字のことである。これに龍形文字（蛇の比礼）、大八島文字（蜂の比礼）、楔形文字

(首尾の比礼)、象形文字(種々物の比礼)等の種類がある。すなはちアイウエオ五十音すなはち五十鈴の表音文字であり、これを麻通(まゆ)すなはち布斗麻通文字と云ふ。この五十音言霊図が佛教の云々一切種智を表現した曼荼羅である。キリスト教ではこの五十音をマナ(Manna)と云ふ。すなはちモーセがこれを以てイスラエルの民の魂を養つた所のもので、聖書には「神の口より出づる言葉」と記されてある。「比礼挂くる」とは此の五十音の図表(曼荼羅、天の班馬)を掲げることである。

手楯とは手次すなはち手の指を次々に動かして教へること。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十(十拳劔)、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇(二十拳劔)、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇(三十拳劔)、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇(四十拳劔)、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇(五十拳劔)の数を以て法界の實在実相である言霊を位置師、時置師、処置師すること、すなはち万物の時処位を確定し適用する道である。言霊の典型は天照大御神の八咫鏡を最勝の法とする佛教の阿耨多羅三藐三菩提、神道の三貴子(天照大御神、月讀命、須佐之男命)の典型である。この中で八咫鏡を朝廷または沙廷と云ふ。言霊アからけるまでの配列として示されたものであるからアサ(麻)と云ふ。これが人間のあらゆる靈魂、主義、思想を審判する一切種智に基く根本の人間精神の法典である。言は矢の容れ物であり、矢は言霊が飛び行く様、言語の象徴である。比礼、手楯によつて明らかになされた天照大御神すなはち皇孫命

の命令教示を直接の言霊麻通ではなく、概念、象徴、比喩等の方法を以て詳述して、所謂憲法、法律や、道徳律として発表宣布する役目が「教員小伴男」である。

劔はソルギであるが、神道の劔は必ずしも鋼の劔の意味ではなく、靈劔、神劔である、その実体は前記の十拳劔、九拳劔、八拳劔である。つて、哲学上のその正体は判断及び判断力である、佛教では槃若と云ひ、不動明王の智劔と云ふ。日本武尊が倭姫命より給はつた「劔刀」としての草薙劔である。この劔を以て万機の實際を裁断し処理する。これを政と云ふ。政はすなはち祭である。劔は釣る氣の義でもあつて、万機を八咫鏡に眞釣り合はせて調和せしむる事である。斯の如く、「ア段」に位する天皇の下に四伴男が居て活動する。「比礼挂くる伴男」は言霊イ。「手楯挂くる伴男」は言霊エ。「教員小伴男」は言霊オ。「劔佩く伴男」は言霊ウを取扱ふ役目で、この四伴男は後述する「祓戸四柱神」に當る。

高天原に神留ります、皇親神湯岐神湯美の命以て、八百萬神等を神集へに果へ賜ひ、神議りに議りたまひて、我皇孫命は、豊原の水穂國を、安國と平けく知しめせと著依とし奉りま。太古神代の精神文明の証史的発祥地としての高天原は、或は千ベソットか、パミール、イラン辺りにあつたかも知れない、或はこの日

本であつたかも知れない。本當の歴史はまだ不明である。哲學家教  
的に云ふ高天原とは「其の清み陽なるものは汝靡きて天となり」(日  
本書紀)とある現象界に超越した純精神界、實在界、法界のことと  
ある。

その場所を生理的に見る時、其処はすなはち人間の頭腦である。

「オソム(頭)テンく(天)」と日本の小兒が母親から教へられる。

更に「千々く(手拍ちく)アワマ(吾、我、和)」と云ふ。その

手拍ちは十指を以て二拍ちするから二十であり、布斗麻通である。

吾・我は岐美二神であつて、吾我和はその御子産みの産靈である。神

すなはち人間の精神的性能としての生命の自覚の要素の全量はその

精神界、すなはち生理的肉体的には頭腦の中に詰(塞、留)まつて

居り、それ以上でもなく、それ以下でもなく、充塞充滿し、神留り

坐して居る。この人間の精神性能の全量の把握態を「久遠冥乘の釈

迦牟尼佛(釋迦牟尼)と云ふ。

「神漏」は神室である。形而上の宇宙法界の事であり、同時に神

が坐します室である頭腦の思索中枢のことである。この神室は陰陽

主宰の両儀に分れる。神漏岐は伊弉那岐(高御産巢日)、神漏美は

伊弉那美(神産巢日)である。岐は氣であり、美は身である。宇宙

は最初に言靈ウと現はれて、そのウから剖判を開始することによつ

て、先づ主体の岐(アオウエイ)と客体の美(ウラウエキ)の二つ

に分れる。易ではこれを陰陽兩儀と云ふ。

「八百万神」を種智、麻通、言靈の内容及び、その操作法と見て

もよく、またこれを取扱ふ人間、命、天皇の御守代、百官のことと

取つてもよい。その昔し世界の地理的高天原に有つたと推測される

太古の精神文明の研究機関の傘下に、沢山の聖人覚者(靈知り)が

集まつて、思索を續けて、最後に人類の持つ一切種智と、その綜合

体系である阿耨多羅三藐三菩提、二童子の原理を究る完成するに至

つたまでには、凡そ幾千年の歳月に亘る努力を要した事だつたらう

か。此の間の消息を我々は近代物質科学が今日の完成に近い域に達

するまでの數千年にわたる過程に比べて考へてみるることによつて類

推することが叶ふであらう。太古の精神靈魂と近代の物質科学と云

ふこの二つの文明は、その立地は於て、精神現象と物質現象の相違

があるだけで、宇宙の生命活動を取扱ふ学としては実は全く同一の

ものであり、表裏をなすものであり、その表裏の答へは相似形をな

すものでなければならぬ。

斯うした佛説では十劫(大通知勝佛)、五劫(阿彌陀佛)とも云

はれる長年月の思惟の結果、その最後の全体會議の結論として、仁

仁神命がその研究団体の責任者、代表者として、高天原の形而上の

原理の全内容を三種の神器として携へて、此の文明の道理を、当時

未開蒙昧で渾沌たる生活を送つてゐた民衆に教へ、その道理を以

合理的な社会を組織經營するために、聖人達の集團を伴つて、その世界の高原地域高天原から降つて来た。凡そ一万年昔の事である。この事が神道で云ふ天孫降臨であり、即ち天澤日嗣の発祥である。

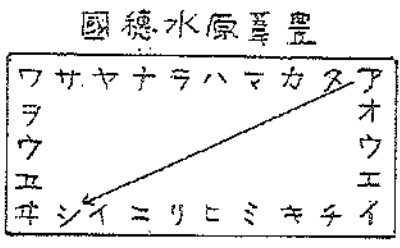
この時天孫降臨には二段階の過程があつた。佛説の一切種智を組織した三菩提の本尊を天照大御神へ大日如来」と云ふ。この天照大御神の原理を麻通名、言靈を以て顕はした姿を天忍徳耳命と云ふ。

「禊」は五十音言靈であり、「耳」は聞し召す意味である。仁仁杵命は忍徳耳命の御子であり、天照大御神の孫に當る。仁は数字。二であり、似、通、近であつて、通通(トト)とは生命の第二次的な、更に第二次的な、すなはち第三次的な藝術と云ふことであり、人類の第三藝術にするはち國家、社会である。仁仁杵命はその第三藝術の創始者、經營者である。

「豊原水徳國」は布斗麻通の顯現として展開される精神界としての形而上の全宇宙である。これを表現してなる漢字は呪文であり象徴であるから、呪文を釈かなければ本義は現はれない。呪文の表面の意味に捕はれて、それをいままなり「葦が茂つた原、稻が水々しく実る國」など、解釈することは形而上の世界を弁まへぬ單純幼稚な考へであつて、学問にはならない。今日までの神道家、國學者と称する者には此の種の弊害が多い。

「豊」はアイエオウ、ワ、ヒチシキミリイニ(風地水火空、法、

乾兌離震巽艮坤)の母音、父韻の十四音であり、数的には8+9+1+1でもある。「豊原」とは言靈アよりシに至る一切種智が存在する宇宙の広場(原)であり、「水徳」とは水火(すなはち陰陽の義)でもあり、稻徳五十音言靈が瑞々しく実つてゐる布斗麻通の世界と云ふことでもある。



天孫仁仁杵命が降臨された所は第三次的な文明の世界であつて、生み出されたままの自然界ではない。文明は人間精神の具現として発祥し発達し展開し経綸される。科学文明もまたもとより精神の所産であつて、たゞ科学の場合はその自己創造の知的、肉面的、主動的な原因を捨棄し、現象だけを抽象してゐる。その自ら行つてゐる捨象作用を忘れてゐることが現代科学文明の行詰りの原因であるとも云へる。また捨象された半面の真理すなはち科学を科学してゐる主体の真理に気付くことが、科学が完成されるための不可欠の方法であるのである。

豊原水徳國、一切種智、三菩提、三種の神器、三貴子として全宇宙を形而上の法界として精神の上に把握し、その原理を自己の生命が存在する空座、高御座、佛陀、蓮華台として、その上に神位にして、此の原理を用いて人類社会を經營する者が世界の王の王、天

津島天孫である。傳説ではこれを転輪聖王と云ふ。

斯く依り奉りし國中に、荒ぶる神等とは、神問はしに問はし賜ひ、神掃ひに掃ひ賜ひて、言問ひし磐根樹根立、草の片葉をも言止りて、天の磐座放ち、天の八雲雲を嚴の千別に千別まで、天降し依り奉りき。

天孫降臨以前の世界の様相を古事記は「豊原の千秋長五百秋の本穂國は、甚くさやまてありけり」と述べてゐる。また此の頃の地上の現実世界には天孫降臨以前に高天原から分離して行つて、葦原部國（四方津國）を經營してゐた荒振る神である須佐之男命とその

後継者大國主命の天津金木思想が基調となつてゐるところの自己の感覺（言靈ウ）を中心として動いてゐる身勝手なセクシヨナリスム生存競争、霸道主義、権力主義の無軌道な思想が横行してゐた。

さうして須佐之男命の霸道主義時代に於ける人間の生命の動きの様相、すなはちその須佐之男命の性格、神格と一切種智である言靈を以て捕へ示した五十音の配列を天津金木と云ふ。また「荒」の音圖とも云ふ。この五十音圖はアからラまでの向に展開するからアラ（荒）である。キリスト教ではこの思想が横行する世界を「荒野」wilderness と呼んでゐる。「天國は近づけり、主の道を行くせよ」と荒野に叫ぶ声あり「馬の位」とある所である。

天 津 金 木

ア	カ	サ	タ	ハ	マ	ヤ	ラ
イ	ウ	エ	オ	カ	サ	タ	ハ
キ	ク	ケ	コ	カ	サ	タ	ハ
ク	ケ	コ	カ	サ	タ	ハ	マ

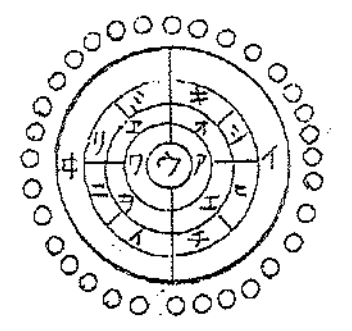
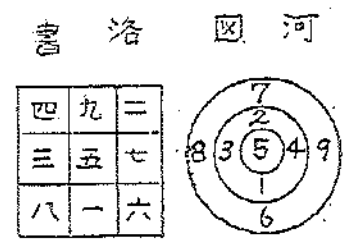
相がアカサタハマヤラであつて、アからラまでの配列であるから「あう」と云ひ、また力からラまでゝあるから「から」(唐、空)と「韓、劔の太刀」とも云ふ。アラの世界觀を振ふ(宇宙、運用する)故に「荒振る神」と云ふ。

天孫降臨の際に於ける須佐之男命の荒の思想の後継者大國主命との折衝や、武甕槌神と建御名方神との争いは、現実の戦争ではない。生命の全局の主体性に則つた高天原の思想と、言靈ウである現実の現象の向に陥踏する地上の霸道思想、生存競争思想とが、その合理性を生命の知恵である麻通の運用の上にて較べ合った議論の上の戦であつた。この結果自己の世界觀、社会經營法が不完全なものであることを存直に納得して、大國主命、言代主命、建御名方神は爾後天孫の道法を遵守することと誓約し、世界の指導を天孫の高天原の原理の前に譲渡した。この事を「言問ひ和はし」と云ひ、「國讓」と云ふ。

「言問らし」は大國生命・建御名方神等が賢問論議をしかけたことである。「磐根」は五葉音で、地水風火空と木火土金水と水の如く、實在である五母音アイウエオのみに立脚して、実相の律であるハ父韻の原理を欠除した言語である。また所謂弁証法思想のことでもある。「樹根」を氣音と訳せば感情論のことであり、例へば末法時代の宗教的信仰がこれである。「草の片葉」とは雑々の書いた言葉、即ち麻通字にあらざる、例へば漢字などのような種々の外國文字であり、述べては音物として著はされた様々な主義思想のことである。この様にしてその当時世界に行はれてみたであろう、一切種智・言葉に立脚しないやうした言語・文字・思想の使用を一旦悉く停止した（言止めた）わけであつた。斯くして世界は聖書に記されてある如く「金地は一つの言葉、一つの音のみなりき」（創世紀）と云ふ統一された姿にまとまつた。

その初めの一つの言葉はウであるが、そのウが実相をあらはして五十音である一系の言語に展開する。その五十音全体もまた一つの言葉、一つの組織の言葉である。古事記の「天地初発」の音がウであるが、その初発とは人類学・考古学・天文学上の始まりのことではない。恒常の「甲今」であるその今が今はじまるその初めの涌息である。その初めのウが今展開し、その今の全内容が五十音麻通であり、エデンの園である。

「天の磐座」は五十葉座であり、すなはち五十音種智の組織、天の班鳥である。これを簡単に五葉座とすれば、アオウエイの五母音であつて、宇宙に「鳴り鳴りて鳴り合はぬ」大自然の實在、荒（地水風火空）の音である。このブライマから五十音が生まれて来る。また磐座を天津磐境の意味に取れば古事記冒頭の先天十七神、十七音に當る。法華経で多宝佛と云ふのはこの天津磐境のことである。易ではこれを河図・洛書として、實在すなはち母音と、現象の節理である父韻の両面に數を以て顯示し、兩者を組合せたものを木極圖（周原漢）と云ふ。易では理を示すに數に於て、直接言葉は使はない。この場合天の磐座を天津磐境の義と取るのが適當である。



天津磐境

即ち「天の磐座放ち」とは天孫降臨の時にこの生命の木極と、その木極から発する始原の先天・先驗の

の原理が初めて世界に開示されたことである。

「天の八重堂」に似た言葉に「出雲八重垣」がある。須佐之男命大國生命の國土経営のやり方を「天津金木」と云ふ。世界がカサタナハマヤラの順序で運営されることで、これが出雲風土記にある大國生命の「國度」の原理である。それと同時にこれは一九七〇年



の現代に於て全世界が経営されてゐる文明操作の基礎的趨勢である。この趨勢が嘗て天孫降臨以前に於ける非生命的・非理性的時代の趨勢であつて、この世界と社会に於ける人間の生命不在、生命無視、生命無自覚の傾向を合理化することが天孫降臨の目的であつた。またこの事は後段「天津金木を本打ち切り末打ち断ち」とある大鼓祝詞自体の仕事である。

各自の主観的、感覚的恣意の赴くままに、霸道思想、弱肉強食、生存競争の地獄相を現出して、結局自分自身をも共に滅ぼしてしまふ天津金木へ思想的趨勢がすなはち出雲八重垣であつて、この八重垣の法を生命化し合理化した姿が「天の八重雲」である。それは八重垣を組み替へて八重雲にすることである。この組み替への操作を「葦の千別き」と云ふ。千別きは道<sup>みち</sup>を別<sup>わか</sup>けるのである。

大鼓には最初に「出雲八重垣」を「天の八重雲」に組み替へることが述べられ、次に「天津金木」を「天津木祝詞」に組直すことが説かれてゐる。両者の意義は全く同じ事であつて、この事が繰返して二度説かれてゐる事に注意しなければならぬ。前者は神代の始まりの天孫降臨の歴史を述べたものであり、後者はその原理を更に詳述したものであると共に、来るべき時代に於ける罪穢の処理法の予言であり、將來に向つて発せられた勅令である。すなはち今日に於ける「天の岩戸開き」の教示である。

出雲八重垣

カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ

天の八重雲

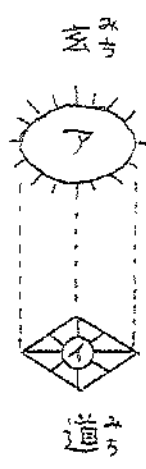
タ	チ	テ	ト	ツ
カ	キ	ク	ケ	コ
マ	ミ	ム	メ	モ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
ラ	リ	ル	レ	ロ
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
サ	シ	ス	セ	ソ

斯く依り奉りし四方の國中と、大倭日高見國を、安國と定め奉りて、下津磐根に宮柱木敷き立て、高天原に今木高知りて、皇孫命の瑞<sup>みづか</sup>の御舎仕<sup>みくらつかひ</sup>へ奉りて、天の御蔭<sup>みかげ</sup>、日の御蔭<sup>ひのみかげ</sup>と隠りまして、安國と平けく知しめさむ

然らば世界の高天原から天孫を中心とする聖人達へ一団が地球上の何処へ降臨したものであらう。「ここは嶺南<sup>せうなん</sup>の韓國<sup>かんこく</sup>を笠沙<sup>かささ</sup>の前<sup>まへ</sup>に求<sup>もと</sup>ぎ通りて(古事記)とあるから、これは大陸を通過して九州の笠沙岬に上陸された記録と見られる。ここに始めて日本を根拠地として天孫すなはち天津日嗣天皇の世界経営統治がはじまった。天孫降臨と共に世界の精神文明指導の政府、教府が設置され、その組織機構等すべてが高天原の布斗麻通の原理の具現であつた。

「大倭日高見の國」の日は靈であり、靈魂であり、その生命の靈魂の自覚であり、そしてその自覚の実体は言葉であり、言葉であつて、神にその自覚の出発は言葉である。此の生命なる日(靈)を高く仰ぎ見るためには、その基礎であるところの下津磐根、言葉イの内容

を定めてその間に大倭(大和)の國家が構成される。

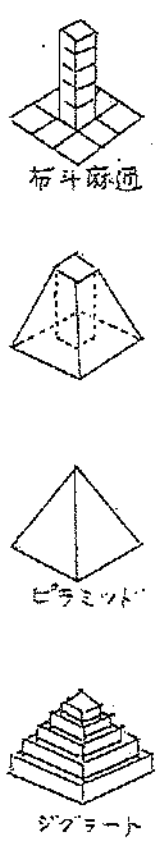


言靈イは地上の依いとて、「下津」に展開する。「磐根」は五十音であつて、すなはち布斗麻通、一切雑智である。人類の一切の知性を雑智として悉く把握表現したものが五十音であつて、この雑智を土音とし、聲とするのが正当な文明を建設経営する唯一の基盤である。「道」は「大摩尼」なり、一の菩薩有りて結跏趺坐す。名を菩薩と曰ふ。「觀音變菩薩行法經」とある如く、佛、菩薩が時処位する形而上の蓮の音が布斗麻通である。

この事を更に簡單な形式で説明すれば、それはキリスト、イエスが産み落された馬槽うまばらであり、親鸞が逆説的に「ともも地獄は一定のすみかぞかし」(數異鈔)と云つたその地獄ぢごくでもある。哲學上で権と稱されるこの八數を基として展開する範疇の中に救世主が生まれ落され、菩薩が養育され、その上に佛陀が結跏趺坐する。宗教上の修練としての個人の成徳成道の基盤と、文明社会を建設する原盤はいずれも共に同一の「下津磐根」である。

「宮柱」はアオウエイの五母音である。これを天之御柱と云ふ。「天之御柱、天之御量柱、一心の靈台、諸神變通の本基」(神道五部

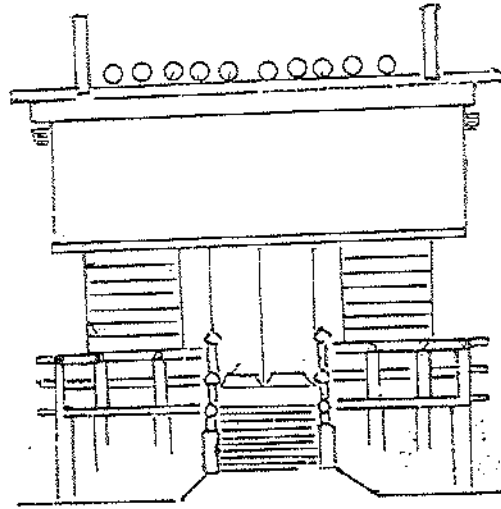
書)と云はれる。「下津磐根」と「宮柱」の姿は次の如く、この四角錐の形を高千穂の奇振嶽と云ふ。この形はまたピラミッドであり、ジグザグトであり、須彌山である。



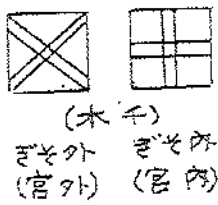
「高天原」はこの場合アオウエイのア段に當る。宇宙万物の実相現象は先づこのアの展開としてあらはれる。「柳は緑、花は紅」とか「溪声長口舌、山色妙色身」など、云はれる。五十音圖を家屋に擬へる時、ア段はその屋根の棟に當り、アアカマハラナヤサワの十音を天兒あまこ命と云ふ。

初て、「皇孫命の瑞の御舎」の形式は伊勢内宮の建築様式に默示されてゐる。それは五十音圖を数理にあらはして立体的に示した形式であつて、此の建築を「唯一神明造り」と云ふ。神の原理を明かに示した構造と云ふことである。その様式を説いて行こう。その屋根の棟に十本の鯉木こいすき(數招き)が並ぶ。これは前記のアカマハラナヤサワの十音を示すものである。本殿中央に高さ五尺の白木の柱が立つる。これを「天之御柱」と云ひ、アオウエイの五母音を示す。入口の十段の階段はまた十數を示し、階段左右の御橋五の六個はアウイ、ウオエの六母音を示す。縁側の周囲の二十個の「葱柱」は五十音圖の周囲の二十六音を默示する。五十音布

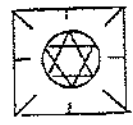
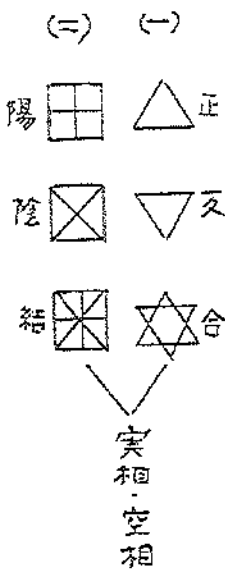
斗麻通の原理は此。唯一神明造りの教示は言霊と肉付けして行くことによつてその形而上の実相が明らかになるように造られてある。



熊木の西端には「千木」が高く掲げられてある。千木は道木であり、また契りの表でもある。男女の契りによつて子が生まれる如く、主客、陰陽の實體の契り、すなはち交流、風応同交によつて現象を生むことである。これを産霊とも云ふ。産霊とは霊すなはち言霊と産むことであつて、現象の實體、自覚体は言語である。言霊の上ではアオウエ①とワヲウエ②の主体と客体が契り、キシチニヒミイリの父韻とアオウエ①の母音が結ばれて三十二個の子音が生まれる事である。この様は契り結ぶの意義は主体と客体（味と美）の両者の結合の上からと、実体（母音）と知性発現の契機（父韻）の交渉の上からと二様に説かなければならない。



現象の實體、自覚体は言語である。言霊の上ではアオウエ①とワヲウエ②の主体と客体が契り、キシチニヒミイリの父韻とアオウエ①の母音



$6 \times 8 = 48$   
 $6^2 \times 8^2 = 10^2 = 100$

「神踏山深くたどれば二道に千木の片をま行きあひなまし」と言歌にある。千木は右図の(一)の原理の形である。田を高御産巢日(田神結)を神産巢日と云ふ。主体と客体である。田は「内さぎ」の内宮の千木であつて自由に變化し、田は剛であつて、外宮である。

「聖孫命の瑞の御舎」とは天皇が住み給ふ形而上の御秘感(権威)の構造と云ふことであり、以上の伊勢神宮の神殿の構造の数的默示に五十音霊を当嵌めて行くことによつて顕示される。舎(殿)をさ佛教で阿羅漢と云ふ。布斗麻通の原理を体得した人と云ふ義である。太古にあつてはこの五十音図を粘土盤の上に神代文字を以て刻み、これを察して瓦とした。神の原理を明かにする瓦であるからアラカ(顕瓦)と呼んだ。また産ともみかみ(産神・御鏡)とし云つた。すなはち古語が云ふ粘土盤文字 Clay-tablet である。「天の御蔭」と言霊と解し、日の御蔭」を日文すなはち数理と釈こう。布斗麻通は言葉の原理であるが、これに整然たる数理が伴つてなる。万機の祭政はこの言葉と数の双方から直確に判断されて施行される。「隠り」は書き纏むの隠語である。國家実地の指導原理を見出す操作は言葉麻通字と数(一ニ三四五六七八九十、十等叙)を書き纏むことによつてなされる。この故に言霊を「いろは」(母姓)と云ふ。所謂「いろは歌」の四十八音である。母とは文明の母

の教である。此の四十八音がキリストの聖母マリアであり、三世諸佛の母摩耶夫人である。十個の数をみず、かぞ(かぞ)と云ふ。文明の父の教である。

生物学で「種」(スペシー)と云ふことは主に肉體上の意味で用いられてゐるが、この「種」は同時に精神の上にも存在しなければならぬ。肉體の種と精神の種は実は同一生命の表裏両面の肉像をなすものである。肉體の種は生殖細胞の核の染色体の数と質によつて定まるが、精神の種すなはち「種智」とは、実はその細胞の染色体みづからが持つてゐる知性であり、その自覚された内容であると云ふことが出来る。人類細胞の四十八(四十七)の性染色体は精神の精煉された四十八(四十七)の種智言葉と対応してゐる。一番から四十八番までの染色体が実際にアからンまでの言葉の一つ一つと如何に対応一致するか、それは今後の詳細な実験観察の結果、照合に待たなければならぬ。

然らば一体何者が人類の生物学的、精神的「種」を創造したか。それと種と云つては大自然と云つても宇宙と云つてもよからうが、然しこの事は人間が知り得るその知性の範囲外に属することである。不可知を探索しても益入は得られない。不可知を不可知として、可知の範囲内で安住活動することが教智であり、文明である。神道では不可知な神祕を取扱ふことがない。たゞは死後の靈魂の存在な

を説く者は神道者ではない。人間がこのように創られてゐる所の人間自身の分限實際の全局としての「種智」と「種」を検べ明らかにする道が神道であり、人間生物学である。

この物心両面にわたる人類の「種」がその教と性能を授へめ限り人間が人間たることを永遠に失ふことがない。すなはち「種」の原理こそ生物学的にも精神的にも「天壤無窮、万世一系」の原理である。此の「種」「種智」が喜慶品の云ふ「久遠冥業の釈迦牟尼佛」の正体である。天壤無窮、万世一系と云ふことを天皇家の血統が永久に継承する事と云へたのは、過去佛法末法時代における人間不尊としての天皇信仰に基づく感情的要求であつて、法本尊、原理本尊である正法時代に於てはもはや通用しなくなつた。日本國體の實體本質は法である三種の神器、布斗麻圃に存する。三種の神器あつての天皇であつて、天皇あつての三種の神器ではない。

精神的形而上の「種」の内容は言葉と教を以て把握されてゐる。この言葉と教とを言ま繰つて操作することによつて、其心から現はれ、それが顯はれて創り出されて来る科学にもあれ、哲学や政治経済の法にもあれ、あらゆる文明の事態を誤りなく指導經營して行くことが出来る。すなはちこの言葉布斗麻圃三種の神器の法によつて始めて地上に諧調ある平和な「天國」「海安國」「理想世界の實現を期することが叶ふのである。

國內に成り出て、天益人等が、過ち犯しけむ種々の罪事は、

天津罪とは、群放ち、瀆埋め、禰放ち、頻齋ま、串刺し、生刺

ぎ、逆刺ぎ、屎戸、幾許の罪を天津罪と宣りわけて、

天孫降臨の後、記紀の記述によれば仁仁行命、彦火火出見命、鵜

草葺不合の命が次々に皇統を継承した。一方竹内文、歌等には、

日本の天古神代は長年月に亘つた精神文明の黄金時代であつて、是

等神代の皇統は一人宛の天皇ではなく、夫々十数代又は数十代にわ

たつた皇朝であつたと伝へられ、その詳しい皇統譜が現存してゐる。

殊に鵜草葺不合朝は七十四代連綿として、その最後の狹野命が改め

て神代磐余彦命(神直天皇)として立つて、昭和に至るまでの皇朝

を創始したことが記されてある。七十三代の彦五瀬命(伊勢天皇

大御神)に代つて狹野命(復佐之男命)が起つた神代維新は歴史的

政治的に何を意味することであるかは別の冊子に説いた。

この太古神代の天皇の御即位式に際して、全世界の各民族の王達

が挙つて采朝し盛儀に参列した。又代々の天皇は御治世の間に知食

される世界の國々を巡幸することと例とされ、この時日本から世界

に言語、文字、技術、神道神話等の文明を教伝した。神代はまこと

に世界平和の理想時代であつた。だがその詳細を述べるとは本篇

の目的ではない。

然しやがて葺不合朝の中葉末期に及び頃、世界にようやく人類の

第二の文明が興るための大變化の兆しが現はれて来た。この時人類

の永遠不變の肉面的文明の把持者としての高天原の朝廷自体に於て

は、もとより本質的には此の變化の影響を受けることはなかつたわけであるが、

「生めよ、殖えよ、地に満てよ」と旺盛に繁殖して行く「天の益人

人類の間に、天津日嗣の生命の指導から遠脱する 勝手な個別的な

生き方が、云ひ換へれば霸道と生存競争を基調とする社会生活のや

り方が、今より凡そ四千年昔の頃から抬頭する傾向が現はれて来

た。と云ふことは高天原の外の世界に於て、天孫降臨以前の荒振る

神の思想が再び世界に活躍を始めた事であつた。

前述の如く、天孫降臨以前の世界がその荒振る神の「出雲八重垣

の思想の下に在つたのを「天の八重垣」の原理に創り改めた事が日

本隆國であつたが、神代維新の少し前頃から、世界に再びその昔し

の八重垣の思想が活動し始めた。すなはち此の時歴史的には二度目

の八重垣の世の中、荒振る神の天津金木の時代が開始されようとし

つたのであつたのである。

この爲に葺不合朝末期には世界の政府、教庁としての天津日嗣天

皇の朝廷の權威はようやく萎れ、諸外國との交通も杜絶えて、やが

て人類の生命の光りである高天原の精神文明が日本自体の中に自己

を隠没する天の若戸閉鎖の時代、佛教で云ふならば佛陀の正法の入

涅槃時代、更に神代以後の歴史的形態として云ふならば葺不合朝に於

ける神靈の同床共殿廢止の時代に入る気運がようやく近づきつつあつた。大祓祝詞はあたかも此の日本並びに全世界の思想的な大転換が起り始めた時期に當つて制定された。昔不合三十八代天津太祝詞子天皇の御事業であつた。

この時高天原朝廷では爾後の天の岩戸閉鎖すなほち惟神道、隱没時代に於て、天之益人等の上に抬頭して来る大祓の所謂「非穢」の活動をそのまま有意義に活用して、人類の第二の文明の創造を計画し、長年月を経てこれを完成しようとする雄大な経綸が着手された。それは生存競争を基調とする世界の中に、その生存競争を方便として、新たな人類の第二の文明科学を創造する経綸であつて、そのために遠く天孫降臨以前の渾沌時代に然あつたと同じ須佐之男命の天津金木、出雲八重垣の法が再び世界運営の基調とされる事となつた。この時期に當つて神代上古の天津日嗣から次々と指令を受けて、大きな意味での天津金木の思想の範圍内で、世界の人心の指導と國家民族の經營に従事した人々は、モーセ、釈迦、老子、孔子、マホメット等の聖賢達であつた。何れも新らしい世界経綸の計画の本にその新時代の始めの頃世界に活動した人々である。

然らば従来の宗教的信仰の上から絶対の聖者、予言者と目されて来たこれ等の指導者達が、猶ほ自由対立の天津金木の動向の範圍内の人達であつたと云ひ得ることは、一條如何なる理由からであるの

か、どうした事のいきまつの筋合いに就ては「第三文明への通路」の中で、天津日嗣の経綸の上から、その人達の活動の因縁が説いてある。

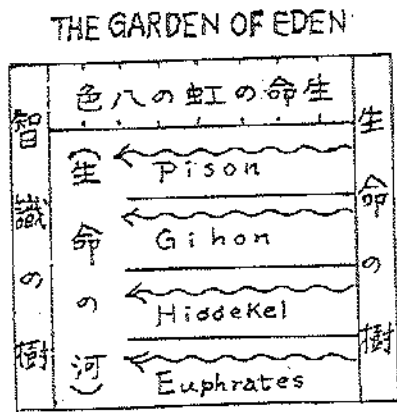
以下に説く天津罪・國津罪は、「出雲八重垣」「天津金木」を基調として運行してゐる月讀命・須佐之男命の世界の四千年にわたる様相であり、すなほちそれはその当時からそのままに引續いてゐる現在我々が住んでゐる現代に於ける世界の様相と欠陥を指摘したものである。然しこれが罪穢であり、欠陥である事はその罪から離脱した正しい原理の上に立つことによつて初めて識別し得ることで、四千年にわたる正史的経過を有する世界全体の傾向である天津金木の法で拘束されて生活を送つてゐる者にとつて、一般にその罪の自覚が無い。罪を犯しながらそれが罪であることを知らない。歴史が末法のどん詰りまで降つて、世界の混乱紛争が極限に達する時、初めて人類苦悩の原因が人間自身にあること、世界運営の基礎法の誤りにあることに愕然と気が付いて、正法の存在に想倒する。

「天津罪」とは精神的な罪であり、高天原の形而上の律法を犯す罪である。天照大御神は「營田」を作つていらつしやる。それに縦横の溝がある。また「神衣」を縫つていらつしやる。衣に縦横の糸

がある。縦に次元の段階をアイエオウと取り、横に時間空間の展相をタカマハラナヤサと並べ、全法界精神界をこの縦横に区画して、この区画の中に一切種智五十音を配列し整理した洪範が神田(御手代)であり、神衣である。すなわち八咫鏡であり、天津太祝詞言靈図であり、天津神籙である。またこれを天才班馬(ふちこま)とも云ふ。佛教では曼荼羅と云ふ。マンダラは大和言葉のマダラである。天津罪とは此の管田の道法に遠致する形而上の罪、人間の種智の組み立て方、動かし方、使い方の誤り、思想の樹て方の過ちである。

(鏡咫八) 田 管

ア	イ	エ	オ	ウ	ツ	ク	ム	フ	ル	ヌ	ユ	ス	ワ
タ	カ	マ	ハ	ラ	ナ	ヤ	サ	シ	セ	ソ	ジ	ズ	ズ



神田は管田である。管田と讀めば、田の間に意味も音も相通じらる。漢音がどうしてヘブライ語になつたか、その経路はまだ判らない。

天津罪は縦横に仕切られた田の形の小間(駒)に言靈が並んで班になつてゐる。「解放ち」はその縦横の仕切りを取り去ること、「解放ち」の通は生命の河である靈の通り道であつて、そのアケカマハラナヤサワの横列五段の順序を破壊することが解放ちである。「頻時

ま」(重播種子)はたとへば言靈の上では同じアである宗教と藝術を本質的に別箇のものとして扱つたり、力の次にマと変化すべきものを、その時期になつても力の状態を繰返し續けてゐる如き類である。

「串刺し」は團子を串で貫くように「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」、すべて思想や正義や宗教や理や或は政策等を以てアイウエオ五行の價値体系の順序を固定して、生命活動の自由を拘束制限することである。「生刺し」は縦横の生命の体系を狂はすこと、もしくは生命の樹であるそのアイエオウのどれか一つ、二つを取除くことである。「逆刺し」は性刺きであつて、横列の万物の真相、すなはちその性質変化の規律を混乱することである。「糞戸」のクン五組素と解すれば、それは五十音図の構成要素の言靈そのものことであつて、「糞まり散らす」(古事記)とあるから、言靈種智を撒き散らして、その有機的生命的な組織を失はしめることであると解される。以上すべて精神の自覚の要素、諸法の空相真相の原理である言靈摩尼の正規の配列を転倒破壊することを天津罪と云ふ。

天津罪の審判を行ふにはそのための洪範、典範として言靈八咫鏡を掲げて、一切種智の全局の上から人間の靈魂とその時位に於て仔細に観察点検する。そのためには憲法も法律も道徳律も教理も不用であつて、その時々の場に於て対象の靈魂を裁判するのである。この審判を沙廷(朝廷)と云ふ。キリスト教の最後の審判、佛教の

地獄の閻魔の庁の裁判がこれに當る。

凡そ人爲すなほち文化現象にあつては、精神が創造の主体であつて、行爲はその活動であり、思想は精神活動の追思返照である。現象(物)は物自体で存するものではない、主体である人間の精神と対象とが結び付くことによつて初めて現前する。これが伊弉那伊弉美二神の創造である。物とは事であり、事とは行爲である。その行爲は必ず言語によつて動く、その言語の奥底に存在する言語の精神的要素が言語である。まことに「初めは言葉ありしであつて、その初めの言葉が言葉である。繰返して云ふが、その初めとは「中今」の

出発のことである。中今とは Now-here (今此地) である。宇宙は常に今此地で今此地から判断して、全宇宙の現象を顕出する。その判断は言葉に即して行はれる。

世界、社会を審判するに當つて形而下の規定としての法律を以てすることは第二義、第三義的のことであつて、言挙げされ概念化された律法は言葉の原理を原理とした上に、すなはち世界の根本の道理を道理とした上に、若しくはその道理の存在を信じた上に應用される便宜的な方法に他ならない。この故に明治憲法の序文(御告文)には「皇祖神宗の後裔に對し給へる統治の洪範を詳述す」と云ふ前圖がなされてある。但し明治政府にあつては、此の惟神の統治の

洪範が末に明徴されてゐなかつた。天津罪の自覚と浄化がなされる限り、後段の國津罪の修被は望み得ない。

キリスト教で云ふ「原罪」はこの神道の天津罪のことである。エデンの園である天照大御神の宮田の言葉の組織を乱すことであり、言葉の原理を淆乱(ハベル)することである。原罪とは何事であるか、たゞその名だけが残つてゐて、今日まであれこれと意味を摸索するだけで、キリスト教ではその実体を明かにすることが出来ない。原罪は睿智、言葉に屬する罪であるから、言葉の原理の伝承を得たない信仰としてのみのキリスト教ではその意義を補へることが出来ない。聖書創世紀の教理はすべて神道の默示である。默示は謎であつて、その謎を紐く鍵は言葉布斗麻通である。

國津罪とは、生膚断ち、死膚断ち、白人胡久美、己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪、高犯せる罪、昆虫の災、高津神の災、高津島の災、畜什し、齧物せる罪、幾許の罪出でむ。

天津罪が形而上の罪であることに對して、國津罪とは肉體の行爲の罪穢れである。扱て、前述の如く日本に留學したイスラエルの子言者モーセは天皇から三種の神器の實體である言葉マナ(Manna)を授かり、また大祓を學んでこれを民族を指導する律法(トール)



として用いた。その記録が旧約聖書に詳細に伝えられてゐる。大袂  
祝詞の簡単な記述は聖書の親切丁寧な解説によつて初めてその意味  
が判るように仕組まれてゐる。両者は同じものであつて、今日の証  
拠のためにモーセが大袂を詳述して残して置くように命ぜられたも  
のである。両者が一致する部分と対照して説いて行く。

「生膚断ち、死膚断ち」は生体死体を殺傷することと解される。  
聖書には「汝、殺すなかれ」(出埃及記)とある。「白人」は従来  
の神道では説が町々で不明瞭であつたが、聖書を参照する時、これ  
は明かに癩病患者である。聖書にはその症状と処置法が詳しく述べ  
てある。「エホバ、モーセとアロンに告げて云ひたまはく、人その  
身の皮に腫れあるは癩あるは光る処あらんに、もしそれが身の  
皮にあること癩病の患處のごとくならば、その人を祭司アロンまた  
は祭司たるアロンの子等に携へいたるべし……祭司これを観てその  
皮の腫れ白くして、その毛も白くなり、且つその腫れに爛肉の見ゆ  
るあらば、是れ旧き癩病の其の身の皮にあるなれば、祭司これを汚  
れたる者となすべし」(利未記十三章)。

「胡久美」は贅肉、疝等のこと、聖書に於ては「凡そ汝の正代  
の子孫の中、身に疝ある者は進みよりてその神エホバの食物を捧ぐ  
ることを爲すべからず……すなはち瞽者、跛者および鼻の欬けたる  
者、脚の折れたる者、僂僂者、侏儒者、目に雲膜ある者、癩ある者、

外腎の壞れたる者等は進みよるべからず」(利未記十一章)と定め  
られてゐる。

「己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母  
と犯せる罪」に就て言霊的研究の上から母音と子音の結合の意味に  
説こうとした武智時三郎氏の説があつたが、それではこの罪は天津  
罪の部類に属する事となるだろう。聖書の律法は更に精しい、「汝等  
凡そその骨肉の親に近づき之と淫する勿れ、我はエホバなり、汝  
の母と淫する勿れ、是れ汝の父を辱かしむればなり、彼は汝の母な  
れば汝これと淫する勿れ……」(利未記十八章)。ギリシヤ神話は此  
の罪をエチプスの錯倒として説いてゐる。

「畜犯せる罪」もまた醜怪な罪であつて、「汝畜畜と交合して、之  
によりて己が身を汚すこと勿れ、また女たる者は畜畜の前に立ちて、  
之と接する勿れ、是れ憎むべき事なり」(利未記十八章)。「男子も  
し畜畜と交合しなはかならず誅さるべし、汝等またその畜畜を殺す  
べし、婦人もし畜畜に近づきてこれと交らば、その婦人と畜を殺す  
べし、是等はともに必ず殺さるべし、その血は自己に帰せん」(利未  
記二十章)と記されてゐる。

「昆虫の災」は蝗のことであらう。次に「高津神、高津鳥」の高  
津は天津に対する言葉であつて、天津神の世界を佛教の所謂諸法空  
相実相の世界、すなはち清浄な神界とすれば、高津神の世界は所謂

靈界、すなはち未だ淨化されざる情実と因縁の世界、傳教の所謂因果流転の迷いの渦中に於ける靈の蠢動妄動の世界である。

また高津鳥の鳥とは「天の鳥船」の鳥であつて、すなはち言靈の意味である。高津神も高津鳥も人間の靈波、思念波である。淨化されない禍の言葉もまた鳥の如く自由に空中を飛行して伝播されて、心得のない他人を自己の業縁の中に巻き込んで、罪の種を種之て行く。「汝等聞くことをつしめ……持たざる者は持てりと思ふものをも奪はる」(馬本伝)とこの故に教へられる。誤つた哲学、奇矯の藝術、偏狭な宗教觀を自ら妄信し、他を煽動する徒はすべて此の高津神、高津鳥の部族である。或はまた不完全な鎮魂帰神の修法などによつて、自己分裂に陥つた修業者は、分離した自己の靈の噴きを神の啓示のよりに錯覚して、自他を混迷に陥れる。これ等も高津神、高津鳥の部類である。

高津神、高津鳥に属する靈(思念)と物(靈物)と見う時、天狗靈、老神、狐靈、狸靈、蛇靈などと呼ぶ。是等の思念が視靈の習癖のある者の眼の感覺に認識される時、それ／＼の動物の姿として映し出される。さうした靈物が客觀的に存在するわけではなく、それを描き出す造形能力が人間にあるのである。高津神、高津鳥に対する判断は言靈の沙汰によるまでもなく、常識を以て簡單に為し得られる。

「高仕し」は牛馬豚等を殺して、更にその肉を喰ふことであらう。百未日本人は獸肉は食はないし、神道ではこれを禁じてゐる。「ウエツフミ」では獸肉を食ふと血が粘ると書いてある。今で云へば脂肪酸が増えて、動脈硬化を起すことである。

「靈物」は所謂まじないである。聖書でもまた律法としてこれを戒めてゐる。「汝等憑鬼者<sup>くらよせ</sup>を憐むなかれ、ト茲者に問ふことを爲して之に身を汚さるる勿れ」(利未記十九章)。「憑鬼者<sup>くらよせ</sup>またはト茲<sup>まじ</sup>を憐みてこれに従ふあらば、我々が面<sup>おもて</sup>をその人に向け、之をその民の中に断つべし」(利未記二十章)。「汝等のうち男子女子をして火の中を通らしむる者あるべからず、またト茲する者、邪法を行ふ者、禁厭する者、魔術を使ふ者、法印を結ぶ者、憑鬼する者、巫覡の業<sup>まじない</sup>をなす者、死人に詢ふことをする者あるべからず。凡そ是等のことを爲す者はエホバこれを憎みたまふ」(申命記十八章)

神足別當鋤天皇がモーセに神道を教へて、免許を授けた。これを戴いて彼が故國に帰る時、天皇から饒の御言葉を賜はつた事が竹内歴史に載つてゐる。「汝モーセ、汝一人より他に神なしと知れ」。この言葉が云い方を受へてそのまま聖書に記されてゐる。すなはち「I am I am」である。このエホバの言葉は「我は有りて有る者なり」など、訳されてゐるが、これでは何のことが意味が判らない。最初の「I」は神であり、次の「I」は自己である。すなはち「五日

(神)とは我(自己)をあらしむる者なり(自己がある事が神がある事である)であつて、神我不二体の境地である。我は神の愛子であり、その顕現であり、神自身の自覚体である。この尊嚴にして嚴智なる我が、我にもあらず神にもあらずる第三者の謔言うはごとくや呪術に左右されることは神即自己の冒瀆である。

我が大板祝詞に説かれた罪と聖書の律法とは右の如くに一致する。この事実を事実として、この緒いとぐちを手繰つて視野を深く遠く進めて行くことがキリスト教徒とユグヤ教徒とそしてマホメット教徒の重大な使命ではなければならぬ。但し従来日本の歴史家・神道者に取つては斯うした事實は釈き難い謎であつて、知つても願秘りしてゐる。或は偶然の一致に過ぎぬと一笑に付して顧みようとしない。單に大板と聖書を対照しただけでは甚だ唐突な話して捕促の方法に戸迷ふことであらうが、斯うした事の解決の緒として、竹内文獻、阿倍文獻、ウエツフミ等や、その他南米ペルーの山中に秘藏されてゐる、やがて世界に出現するであろう大伴家の帝記、國記の歴史文獻を是非とも参照しなければならぬ。

以上のような大板と旧約聖書の関連は今日まで秘密にされ、封印されて来た神道と世界古代宗教の關係が、時刻つて世界に現はれ初めた端緒の一つである。我々は更にこれへは創世記と古事記、ユグ

ヤの三種の神器と日本の三種の神器、默示録と伊勢神宮との關係、更に法華經と布斗麻通、易經と言靈の関連等に就て原理的・歴史的に究明し、これによつてキリスト教、ユグヤ教、マホメット教、佛敎、儒敎と神道との本地垂迹の關係や、更にはユグヤの所謂シオニズム運動の神道的意義等々の全人類の文明の全貌に就ての広汎な問題の過去現在未來に亘る「因果果報」に就て、次々に明白な解決を与へながら、これを全世界に開示する機運を著々醸成しつつある。

思ひを茲に致して、我が皇祖皇宗、天澤日嗣の正代天皇が如何に全世界の諸國家・諸民族の上に無限の經綸を垂れ給ふて居られるかと云ふことの事実を事實として明確に把握認識し、その眞實の基礎の上に世界の万機を廻らして行く事が人類文明解決の出發である。その天津日嗣の經綸の結果が如何に今日の世界相を斯くあらしめてゐるかに肉する歴史的經緯を学び、その經綸が今日に予定してゐる人類文明の大転換期に當つて、高天原の天孫民族、降臨した仁仁行命の後裔として、經綸の遺志と伝統と原理と開頭継承して、日本人が世界の先達として、皇祖神の予定の計畫通りに、世界の科学文明と権力支配の世相の上に大革命、大維新を決定しなければならぬ時が来たのである。この予定の計畫を「天の岩戸開き」と云ひ、また「天孫降臨」とも云ふ。此の事の實施の方法は四千年の昔から、今日のために致へば、伊弉諾尊つて誦唱して来た文章が大板祝詞である。

新く出でば、天津官事以ちて、大中臣、天津金木も、本打切り、本打断ちて、千座の置座に置足らはして、天津菅麻と、本刈断ち、本刈切りて、八針に取替りて、天津祝詞の大祝詞事を宣ひ、この一節は、大板祝詞の眼目であつて、従来様々に意義の積累が行はれたが、言霊が阐明されなかつたから、天津金木、天津菅麻、天津太祝詞の三つの究明が不可能であつた。人類社会に於ける混乱と罪惡の發生は元来すべて天津罪を犯すことに原因する。その天津罪とは形式的な道德律や法律や宗教上の規制や概念的な思想主義に違反することではなくして、人間の精神原素として天與される五十音言葉である市井麻通、一切種智の基本法則をみずから亂し、その正規の組織と運行を破壊したり、固定したり、逆転したりすることである。大板は最初に天孫降臨以前の渾沌世界を説き、次に天孫降臨以後の世界に於て天津罪が第二次的、第二面目に發生した事實を説いた。これに対して本講義は天津白駒の經論の上からそれが發生した原因理由を明かにした。そこで次にその罪の修核、淨化、整理の道を示すこととなる。

その天津罪が罪であることと明かにする根拠は人間性の原理である五十音言葉であり、その言葉の法則を犯すことが天津罪であるからには、その罪を修核する道もまた当然五十音言葉、市井麻通の操作によるものでなければならぬ。麻通の運用として説くのでなければ

他の如何なる感情的、信仰的、或は哲學的理論を以てしても大板の特に此の一節は説くことを得ないし、また麻通の方法以外には自己自身に対する生命違核である人類の靈魂の原罪を實際に根本的に修核することが出来ない。

「天津官事」の宮とは靈屋であつて、言霊の組織としての五十音圖のことであり、この言霊の原理の操作すなはち官事(靈屋事)を行ふ機關、施設が天皇の宮廷である。そして倭法時代の意味に於ける人間本尊であり神であつた天皇と、その罪を審判、淨化、修核するべき天の益人、世界人類の中間に立つてその官事を執行する者が天兒屋命である大中臣である。

天津罪が發生して、やがて今日その修核が必須である時期に至るまでの間には、佛教の所謂正像末三千年と云ふ長期にわたつた歴史的な罪惡時代を經過して来た。その倭法末法時代の内容としての天津罪、國津罪を概念的に云ふならば、それは自然主義と霸道思想である、言霊麻通を以てこの二つの思想の全貌を示した姿を名づけて天津菅麻と天津金木と云ふ。

天津菅麻も天津金木もそして天津太祝詞も何れも共に人類の靈魂の祖立とその運ぶ方であるから、その全貌は言霊を以て簡潔正確に表現される。この三つは神道で取扱ふ三態の種智の組織であり、人間精神の内景を暗示した夫々の典型的な鏡時、法界曼荼羅、宇宙圖

である。これを三童子と云ひ、阿耨多羅三藐三菩提と云ひ。

「笠をさすなら春田山」と云ふ歌がある。春田山は三笠山であつて、人間はあまそ此の三つの体系を笠として頭に戴いて生活の指針

天 津 管 麻

ア	カ	タ	ハ	マ	マ	ラ	ナ
イ	チ	キ	シ	イ	ミ	リ	ニ
エ							
ウ							

天 津 金 木

ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ラ
イ	エ	オ					
ウ							
エ							

天 津 太 秘 詞

ア	カ	タ	マ	ハ	ラ	ナ	ヤ	サ
イ	エ	オ						
ウ								
エ								

としてゐる。笠をさす童子と云ひ。五十音仮名文字に書き通はせてその原理を示して、これを頭に被ることである。髪は鬚通であり、佛

教の筆意に當り、ギリシヤ神話の月桂冠に當る。三つの笠のうち管麻と金木の二つが像法末法の時代相を表現する

罪穢の典型である。と云つたら意外に思ふであらうが、布斗麻通が天の若くは隠れてゐた現在までの像法末法の過程にあつては、これ

が罪穢であること云ふ事を的確に判断、反省、沙汰する方法がなかつた。罪穢とは何であるかと云ふことの自覚が人類全体に渾然として

ある。學者も宗教家も政治家も、乃至國際連合に於てさへも、世界を争けて罪を罪と定める確実な判断の根柢を持たない。それが世界

混亂の根本的理由、原因である。末法の時代が終局に達して、正

法に転換する契機として、明白峻厳な言葉が出現して、その教断に

よつて三千年來の罪が修被される。判り易いように管麻から先に説いて行こう。「天津管麻」とは清

ましい素(衣)と云ふ意味で、大自然から生まれたままで、未だその上に何の知的操作も施されない、清淨無垢な有りのままの精神の内

景である。未だ善惡、正邪、美醜、得失等の判断が加はらないそのままの宇宙相である。「汝、改まりて幼兒の如くならざれば天國に

入るを得ず」とイエスが云つたその幼兒の心である。般若心経ではこれを諸法空相と説き、法華経では諸法実相と説く。「本源の自性

は無眞佛」(証道歌)と禪で云ふ。古事記の神名を以て説けば天津管麻とは岐美二神が生み出した最

初の有りのままの宇宙の全貌である。「火之迦具土神」であるとも云へるし、その迦具土の言靈麻通字を果めた「和久産巢日神」とも云

へよう。また禊祓の過程に於て現はれる神としては「八十禰津日神」すなはち言靈アでもある。禰津日は罪穢れである。すなはち天津管

麻は一切種智の全景であり、造物主伊弉那岐大神の音圖、佛教の伊舍那天の曼荼羅であつて、識界の頂点、須彌山の頂上、紫微天宮、

北極星座に位して、全宇宙をそのまま、有りのままに自己の内容、自己の顕現として断斷してゐる大自在天(摩醯首羅天)の意識界の

全景である。

元来大自然は善でも悪でも、美でも醜でもない。心経や法華經に導かれて諸法空相實相を捕へただけでは、それは文明の素材ではあるが、文明の道とはならない。然しそれ自体調和して円融無礙に運行してゐる。然もその運行に當つて知性の活動を必要としない、弱肉強食も悪ではないし、貧民救済も善ではない。一切が「無功徳」(碧岩錄第一則)であり、一切が救されてゐる。神は一切を善しと見給ふ。神が善しと見給ふから一切がそのままに存在するとも云へよう。即ちこれは解脱し解放された天人(辟支佛)の處境である。これを稱して玄と云ふ。未だ人間の文明の道が現はれざる以前の天地のみちである。斯の如き大自然界、大宇宙の全内容を五十音言靈の組織として現はした姿が天津管麻である。

草木虫魚鳥獸は此の世界に嬉々として繁茂棲息してゐる。人間もまたもとより此の世界に基礎を置いて生活してゐる大自然界の生物の一種であるが、然しその中で独り人間だけは大自然から附與されな知性を自覚し、運用し、且つ継承し、その大自然界を自己の生命の目的に添ふように指導改造しつつ、且つ人間同志の相互關係を合理化しつつ、或は他の生物の「種」の保存に關心しつつ、独自の文明生活、社会生活を営んでゐる。

人間はこのように神から委任されてゐると云つてもよいのであつて、此の意味で人間を万物の靈長と云ふ。この大自然の生命の上に

加へする人間の営みや文明と云ふ。文明とはすなはち道徳と科学である。文明の世界は既に其処に自覚された知性が働らいてゐるから、もはや大自然界ではない。そこでその自覚した知性から元の大自然の生活を改めて顧みる時、有りのままの嬰兒の世界が実は高生道であり、飢鬼道であり、修羅道である。そして斯うした大自然の生活から離脱して第二次的に建設された人類獨特の文明世界を、すなはち大義名分の明瞭な世界を通(仁仁粹・通通整)の世界と云ふ。

「天津管麻を本列断ち、末列切り」とはその五十音図の本末である。母音アオウエイと半母音ワウヰとを取除くことであつて、五つの母音は梵として把握された宇宙の玉体的實在であり、五大風(水空火地)であり、五行(木水金火土)に當る。その五大五行からハタチカマラヤナ(ヒキシキミリイニ)の八行、八針の八父韻が発現する。八父韻は自然界のものとしては万物の時間空間的變化の季節のけいめとして顕現し、人為的創造に係はる文明世界にあつては生命を運営する道を時に依じて転換させて行く變化の節々である。この節々を識別すること「節折り」と云ふ。天皇の即位式に此の儀式がある。

八爻讀は易の八卦であり、傳教では八正道と云ふ。

「八卦に取替く」とは此の中間の變化の相をハクサカマラヤサの八相に識別すること、この八相の順序をクカマハラナヤサである天津不祝詞の順序に組替へることが大教の眼目である。これと同時にアオウエイと並ぶ存在の位置の順序も天津不祝詞のアイエオウに組替へるのである。以上の操作は次の天津金木の組替への場合にも同じである。

「天津金木」は物として考へれば金や木などの物質物体の意味でもあるが、精神として見れば神成基の意味でもある、管麻は素(も)と(で)あり、金木もまた基(もと)であつて、どちらも不祝詞に組替へられべき素材であり基礎である。金木は天照大御神の弟である須佐之男命とその後継者である大國主命の靈魂の構造を表現した五十音圖であつて、その音圖の意義は古事記の「言靈百神」を理解した上ではないと説明が簡單には受取つて貰へないことであるが、天津管麻にはアオウエイがあつて、ワヲウエエがない。そして天津金木にはアイウエオもワヲウエエも実は元々無いのであつて、母音、半母音の中間の八卦のところだけの世界が金木の世界であり、それは実相界すなはち現実界、現象界だけの宇宙圖である。金木は力から始まつてラに終るからカラ(唐)の音圖と云ひ、韓鎬の太刀と云はれる。

初行のアを加へて考へるとアからラまでであるからアラ(荒)の音圖とも云ふ。

金木が力から始まると云ふことは、すべて人生と文明の運管をカキクケコの心から出発すること、力の心とはすべて掻き集めようとする心である。ここを出発点としてサタハママヤと進展してラに終る。ラは螺であつて、ぐるぐ廻はつて行く糸が判らず、また元の出発点に戻つて同じことを繰返すだけで、結論が出て来ない輪廻転生の姿である。すなはち天津管麻の善惡無記の自然生活と、天津金木の業縁流転の境涯の二つが像法末法時代に於ける代表的な靈魂の姿、内面的な世界像である。

「天津金木五本打切り、末打断ち」とは天津管麻の場合と同じくアイウエオ、ワヲウエエの両端を去除くことで、同時にこれをアイエオウの順序に置替へることもある。「千座の置座に置足はし」との千座は道の座の義で、両端を除いたカサタハママヤの八相を生命の道が組み並べられる満足な順序クカマハラナヤサに置替へることであつて、斯の如き音圖の上の操作、すなはち自己の修抜交省、社会の靈的改草、世界の政治経済維新によつて、罪穢と穢津日の世界である金木と管麻の両界が天津不祝詞の配列である生命の合理的な順序に宣り直され、組替へられるのである。

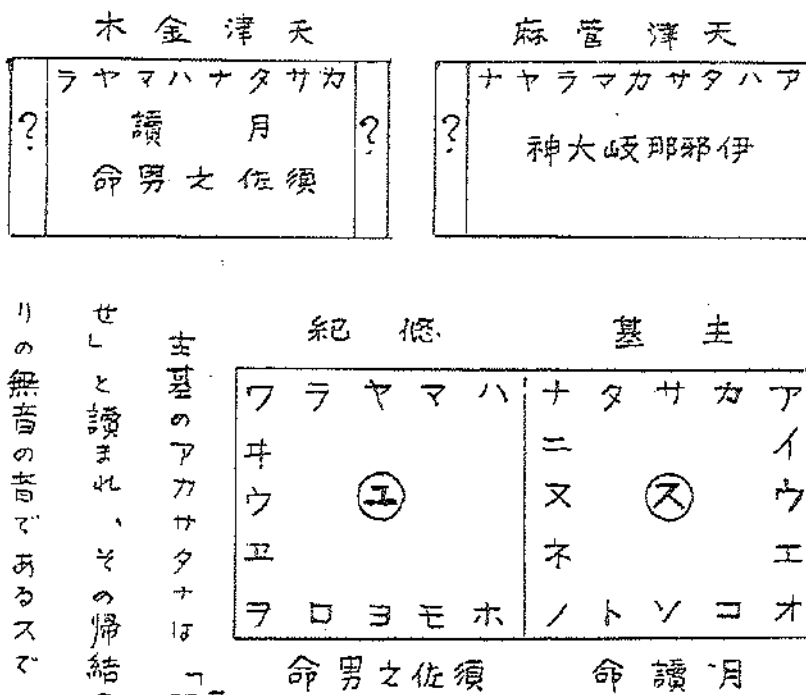
天津管麻の自然生活にしても、天津金木の輪廻思想にしても、こ

れを八針に取り降き、千座の置座に置き足はすために現実の世界の個々の内容をそのまま取上げて一つ／＼整理しようとしても、或はそれを従来の各種の哲学の型でしめくくつて纏めようとしても、そうした方法を以てしては、あらゆる方面が分化に分化を重ねて、複雑化してゐる今日の世界に於ては、文明の全高を余すことなく捕へることは不可能であつて、強いて整理しようとしてもその操作が繁雑極まりなくなつて、拾收の道はない。この事を世界の誰よりも痛切に知つてゐる人は前述の如く國際連合の事務局長であつた。

そこで不可能な此の概念の型の方法を捨てて、すなはち天孫降臨以前の事とすれば、「磐根樹根立、草の片葉とも<sup>かまは</sup>辞止めて」、人間のあらゆる思惟思想をその思惟の原素である一切種智、言葉麻通に、一旦悉く分析、総合、還元して、その種智言葉に於て、それを以て世界を操作することによつて複雑な世界文明を整理、再編成、再組織することが初めて可能である。これが神道大祓すなはち禊祓である。此の卓越した最勝の方法以外に文明を解決する道はない。また言葉麻通の操作であることと度外視して如何に大祓や禊祓を説いても、悉く見当外れであり無意味である。

菅麻と金木の關係に就ても少し話して展げよう。菅麻と金木とは意味が似通つた音圖であつて、金木の中には管麻的要素が含まれ

てゐる。金木音圖を真中から左右両面に分けて、向つて右のアカサタハの部分を主基の田と云ひ、言葉スが真中に位してゐる。左のハマヤラフの部分を悠紀の田と云ひ、言葉ユが真中に位してゐる。天皇の即位式に當つて、先づ予め此の主基と悠紀の田を作つて、そこから收穫される稻穂を刈り取つて、天照大御神に献ることが大嘗祭の始まりである。稻穂は五十名<sup>なほ</sup>聖であつて、言葉五十音の咒物である。



界が内融無碍に活動しながら、そのまま靜(ス)止してゐる姿である。主基は言葉スに還へる道であつて、そのスは天津管麻の大自然の心であり、佛教と云はずキリスト教と云はず、すべて月の世界、月讀

主基のアカサタハは「明<sup>あ</sup>るい悟<sup>と</sup>りの田<sup>な</sup>を成せ」と讀まれ、その帰結の中心は宇宙の初まりの無音の音であるスであり、それは大自然



の命の世界の道である。今日までの全東洋に於けるすべての小乘的宗教が其処へ到達することを目的としてゐる宇宙の始原、自然の境涯が主基である。

また悠紀のハマヤラワは「端を纏めて八つに並べて和せし」と讀まされ、その中心は言靈ニであり、悠紀の田をまたニ田と云ふ。すなはち Utopia の語原である。言靈ニは汪盛に湧き上る湯の心であり、物事が早くすままじく生まれ出て来る建速（竹早）須佐之男命の實相である。宇宙の先端である実相界を八針（八節、八律）に整理して汪盛に物を産み出す科学と産業の心である。悠紀の田は須佐之男命が経営する星の世界である。欧米に於ける科学と産業と、その物質文明を支配運営する者の心の姿を示してゐる。以上の如く主基と悠紀とは天津金木の内容であつて、而も菅麻と金木の両面の意義をあらはしてゐる。（第三文明金々誌五十七号「主基と悠紀」を参照せられたし）

天津菅麻、天津金木、天津太祝詞は佛教の三菩提を種智布斗麻通と以て示し現はした一切の佛智、人間智の代表的な愛養羅である。

觀世音菩薩、勢至菩薩を兩脇立とした阿彌陀如來三尊の原理図と考へてもよい。天照大御神である太祝詞すなはち八咫鏡が本尊であつて、菅麻、金木はその兩脇立である。菅麻は「日の少女」（靈の湧く宮）に宅み給ふ大自然界の造物主伊邪那岐大神の姿であり、金木は

今日まで三千年間の倭法末法の世界を経営して来た月讀命（東洋）須佐之男命（欧米）の姿である。更にまたその金木自体が月讀（宗教）の部分（主基）と須佐之男（科学、産業）の部分（悠紀）に分れてゐるのである。

月讀と須佐之男とは古事記では別々の神として記されてゐるが、竹内文献に於ては須佐之男月讀命と云ふ一神（一命）の名として述べられてゐることは意義あることである。以上の諸神を言靈を以て示せば、伊邪那岐大神（イ）、天照大御神（エ）、月讀命（オ）、須佐之男命（ウ）であつて、この四柱が後述する坂戸四柱大神である。

以上のこととも一度まとめてみると、天津菅麻は主基の田であつて、これは文明の未整理の素材である。また天津金木は悠紀の田であつて、これを再組織することによつて文明が生命あるものとなる。ところの資料である。大抵はこの天津菅麻と天津金木を宣り直し、組直して「天津太祝詞事を宣れ」と指示してゐる。然らば天津太祝詞の言葉とは何か、これに關しても今日まで様々な模索が行はれた。或は「トホカミエミタメ」がそれであると云はれ、「一ニ三四五六七八九」がそれであると云はれた。四十七言靈を並べた「日文」の全文が太祝詞であると云ふなら、やゝ眞義に近いが、その日文は天津太祝詞すなはち八咫鏡を作る作り方の教へであつて、その太祝詞の實際は「タカマハラナヤカ」と云ふ八父韻の配列である。

然らば何故第三の八節の並に「人間人類湯仰の天津木祝詞であるか  
これを知るためには、従来の哲学的思想家方法のより一つ奥の人間の

第五の知恵である「五十音言霊」を開闢して、その入みずから  
がその意義を象を以て修得し実践しなげはならない。大抵も稜板

心彼自身の内面の靈魂の整理修得であつて、客観的な「それ」の問  
題ではない。像法末法の文明が北政神話の予言の如く黄昏に及んで

行く先が見えなくなつた時、次に来る正法時代である新らしい生命  
の文明を建設するためには、人間自体の内面の靈性が本然の姿に立

ち直つて、冥途から出発する以外には道がない。また自分自身すな  
はち人間自体の内面の整理が出来てならない人間には、その人間自身

が創造し経営する世界の文明と社会を全き姿に指導する資格はない。  
斯く宣うは、天津神は、天の磐門を叩きまて、天の八重雲を

巖の千別きは千別きて聞しむ。國津神は、高山の末、短山  
の末に上りまして、高山のいほり、短山のいほりを撥き分けて

聞しめむ。  
「天津神、國津神」は前述の天津罪、國津罪に對する言霊であ

る。言霊の法則を犯すことが天津罪であり、その言霊を操作する人  
が天津神である。言霊を「麻通」としての生命の理法を以て自己を律

し、世界を指導する人である。國津神は天津神によつて明かにされ

而行された律法は適つて生活を営み、社会の秩序を守り、産業に従  
事する人々である。

天津神が聞しむ五十音言霊布斗麻通は、今日まで二千年間「天  
の磐門」の中に藏されてゐる。磐門（岩戸）は五十音所の義で、五

十音言霊を納め藏してある無形の場所のことである。その象徴的な  
現実の場所は伊勢五十鈴宮である。此処に崇神天皇の施策であつた

「同床并殿廢止」と和光同塵政策以来、三種の神器の實體が封印さ  
れてゐて、人間の自覚に上ることなく、學問として説くことを禁じ

られ、もとより政治の上の實際に用いられる事なく秘藏されてゐる。  
この歴史的事実を稱して「天の岩戸隠れ」と云ふ。

天津日嗣の経綸に予定された時が来て、天津金木の法に依る世界  
経営法が終末の破綻を生じ、その法が大板、稜板されて、天津祝詞

の本祝詞の神法が世界に顕はれる時、この本祝詞自体の内容である  
五十音言霊が、伊勢神宮の眼に見えぬ秘庫、磐門の扉を叩いて出

現する。民間神道の予言ではこの事を「二度目の天の岩戸開き」と  
呼んでゐる。記紀や竹内文庫に述べられてゐる天照大神の天照大神

神（天津日向津比賣天皇）の時には行はれた同じ事態を第一回目の岩  
戸開きとする時、崇神天皇以来の岩戸隠れを聞くことが二度目の岩

戸開きである。すなはちこの事は同床并殿廢止の廢止、和光同塵政策  
の徹底である。現在すでに此の岩戸開きは、現実の日本の政治、学

問、宗教と全く没交渉の社会的境域に於て着々と進められつつある。

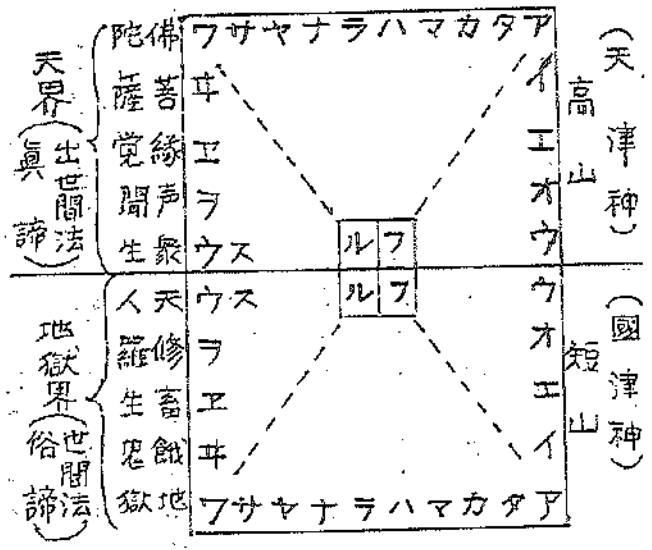
「天の八重雲」と「出雲八重垣」の関係に就ては前述した通りである。

ある。太古に行はれた天津降臨として今回の二度目の天の若戸開きとは、原理的には全く同じ事柄であつて、それは天津金木（或は天津菅原）の横道である八重垣を太閤の道である八重雲に宣り直し、紐替へて、「巖の子別きに子別く」ことである。すなはち天津日嗣の御孫威の千すなはち道と別け開かにはすることである。斯くして言霊神斗麻通太閤の出現によつて、天津神であるべき文明の指導者、世界経綸の責任者達が、初めて天津神が天津神たるべき根本原理を認識し獲得し「聞しるす」となる。

この事は二十世紀の宗教神聖の劇期的大転換であり、三千年昔の佛陀入涅槃以後のことである。これを佛陀の出現契下生と云ふ。佛陀の修業の問題として云ふならば、法華経の云ふ「教菩薩法、佛所護念」である妙法三種の神聖を復原保持することによつて、菩薩が佛陀として成道して真の世界に出現することである。キリスト教的にはこの事が黙示録に説かれた「小羊の花嫁」「生命の域」の降臨の二つの圖の關係、キリストの再臨であり、儒教的には「先王の道」である「結繩の制」の復元である。

「國神神」は「天津神」の指導を受け生活を楽しむ庶民である。「神比、神止」「世言靈」の如くに示して考へてみよう。

「人はパンのみにて生きる者にあらず」と云ふことは真理であるが、またパンがなければ生きられない。霊だけで人間が生きてゐるのではなく、肉体がなければ生命はない。霊肉、心身は唯一生命の表裏である。一枚の生命の表裏を別々なものとして切り離して考へると、肉体のほかは、肉体とは別に神や靈魂が存在すると思ふ願望の處になる。



生命の表と裏は位置（位）に於て悪しきものであり、天に於て貴きものは地に於て卑きものである。この価値観の上下転倒を体得することが宗教の修業である。云ふことも出来る。この両者は顛倒してゐる別箇のもののように見えるが、本当は同一實在アオウエイの現はれである。アガペもエロスも同じ一つの愛の顕現であつて、この両面を具足した者が、神であり同時に獣である人間である。これを「煩惱即菩提」と云ふ。

この時天界は自覚の世界、地獄界は無自覚の世界、自然界、業縁の靈界であつて、自覚をもつて無自覚の世界を調御指導して行く所

に宇宙なる神から文明の創造經營を委嘱された人間が神の子、命、菩薩である所以が存する。依て五十音の一切種智を上下の合せ鏡の百音図に紐立てて、天界地界、天津神國津神の全貌を示す。天界の出世間法(異語)が高山であり、地界の世間法(俗語)が短山である。此の百音図を百教の大宮と云ふ。

此の百音図は八咫鏡すなはち天津神國の姿であるが、挽白の形に上下に重なつてゐる合はせ目の所がウ段に當り。ウからサ行のヌまでの所を「天之宇受寶命」(日文、碓文)と云ふ。百音の中央に「フル、フル」の四音が位する。この図を立体的に見る時、この「フル」(栞留)の所が頂点になる。この四角錐の形を高千穂の奇振振と云ふ。佛説の「須彌山」である。(九頁の図参照)「いほり」は五百理である。五(アイエオウ)を基としての百音の原理と云ふことである。「掻き分けて」は云ふまでもなく書き分けの梵語である。麻通字、一切種智の五十音神名文字を以て眞理を書き分けて顯はすことである。この時天津神は言靈、國津神は文字と考へてもよろしく、この様に五十音圖・百音圖に書き分けて示し申すことによつて、初めて神即眞理の實體が世界人類に開示され理解される。五十音表音文字によつて示し申された(神と云ふ字)眞理がすなはち本来の神道の神である。そうでない神は岩戸隠れの時代に於ける神の仮初めの姿に過ぎない。

天之御中主神、天照大御神と漢字に記されてあるものは、その仮の姿、概念であつて、その仮の姿をあれこれと哲學的、藝術的に描こうと試みて来た事が像法時代に於ける修練探索であつた。また斯うした仮初の「指目の指」としての概念に當敵する實體が存在することを基本要索、信仰の対象として、これと合一しようとする事によつて自己の魂の核はれを工夫して来たことが末法時代のやり方であつた。像法末法のやり方は正法としての神道ではない。この事は單に神道のみが然るのではない、佛教にしても、キリスト教にしても儒教にしてもまた同様である。世界のすべての宗教は言靈としての生粹の正法に違はなければならぬ。

「掻き分け」の意味をもう一歩布衍してみよう。國津神は文字であるが、そしてその文字は麻通字が本来であるが、その他の漢字やヨーロッパ語であつてもよい。前記の圖でアイエオウオアエイと並べても急には理解に苦しむが、これを佛陀、菩薩、緣覺、聲聞、衆生、天人、阿修羅、餓鬼、畜生、地獄と概念或は表象を以て解釈して示すことがもう一つの「書き分け」の意味である。また例へば前述の明治憲法御告文に於ける天津日嗣の世界統治の洪範を「第一條、大日本帝國は萬世一系の天皇これを統治す。第二條、天皇は神聖にして犯すべからず」と時宜に志じて詳述することも書き分けてである。聖德太子の十七條憲法「和を以て貴しとなす、云々」と

と云ふのもこの類である。

斯うして概念的に書き分けて示すと、天津神でない、直接言葉イの操作を行はない、ウとオの次元だけに住む國津神、衆生、庶民にも真理の意義がその人なりに開示されて、これを個人及び社会國家の尊崇、生活の指針とすることが出来る。このようにして言葉を概念や表象(絵姿)を以て書き分けることを佛教で「釈」と云ふ。印度の佛陀は釈氏を姓とし、釈は釈すなほち佛である。法華經の十如是、觀世音菩薩の三十二心身、阿彌陀佛の四十八願等すべて言靈布斗麻(遍)の解説(釈)である。

斯く聞しめしてば、皇御孫命の朝廷を始めて、天下四方の國には罪と云ふ罪は在らじと、科戸の風の、天の八重雲を吹き放つ事(事)の如く、朝のみ霧夕のみ霧と、朝風夕風の吹掃(吹掃)の如く、大津辺に居る大船を、船解き放ち、船解き放ちて、大海原に押し放つ事(事)の如く、彼方の繁木(繁木)が本を、焼鎌の敏鎌(敏鎌)もて、打掃(打掃)の如く、遠る罪はあらじと、被ひ給ひ清め給ふ事を

その昔行はれた天孫降臨は世界の高天原地方から生命の主体の原理を把握した覚者神人の団体が、平地に降つて、合理的な國家社会を地上に創設した事であつた。その人類最初にして然も永劫不變、天壤無窮、万世一系の道義社会の責任者、指導者、経営者が天津日

嗣天皇として、全人類に祝福された伝統を、その間必要なる時期

には天の岩戸隠れ、入涅槃の過程を辿りながら、また時に當面の経綸の企圖方針に応じて、幾度か皇朝の变革維新を行いながら、三種の神器であるその原理そのものの伝統は、今日まで連続として悠久一万年に亘る歴史を經過しつつ、高天原日本(高天原日本)のうちに継承保全されてゐる。これが皇孫命の朝廷の歴史を通じての真姿である。天皇が毎年行つて来た新嘗祭及び大祓の「御贖の儀」は一代に一度行はれた即位式大嘗祭の儀を小規模に繰返す式典であつて、「御麻」(節折り)、「臺」等の儀がある。この祭典に執行されるすべての仕事(動作)と、これに用ひられるすべての器物は、悉くこの不變滅、恒常普遍の伝統の原理を形と動作を以て示し現はした默示であり、呪事器物である。すなほち此の仕事と器物は文章(言葉)を以て示された大祓祝詞に内蔵されてゐる原理と一体をなすものであり、また言靈五十音布斗麻通であるこの原理を同じように呪文を以て默示してある古事記、日本書紀の内容ともまた同一の意義を有するものである。呪文呪事を呪文呪事と知つてその謎を解いて、その真態を現はす時、神道とは唯一つの系列の布斗麻通三種の神器の原理であることを知る。

崇神朝に於ける三種の神器の同床天殿廢止以来、正法が隠没してゐる像法末法の二千年間に於ける天皇の最も重大な仕事は、斯の如

き黙示(咒文、咒事、咒物)として示されてゐる原理の意義を式典の形を以て継承保存することにあつた。それはやがて再びこの原理の實體をもつて、いづれ新しく創造される人類の第二の文明である科学をその原理の中に綜合摂取し、またその像法末法の間に發生した罪穢すなはち社会内容の矛盾種者を贖い修補するための人間性の不滅の原理を、祭典の形で今日まで保存することであつた。二千年の経過の後、今日世界に罪穢が積溢充満し、矛盾混乱が頂点に達して、再び新たな天孫降臨すなはち天の若戸開きが必然である歴史的時期がいよいよ廻つて来た。

宮中や神宮に於ける咒事である儀式祭典の動作は猿芝居だと評されてゐる。その本物ではない芝居の仕草だけを、中実をわきまへずは、よい年寄達が衣冠もの／＼しく、涼風らしく勿体振つて、何時までも繰返し演じてゐるだけで事が済む時代ではない。「五串立て御酒おへまつる神主のうずの玉影鬼ればとほしも」と古歌は揶揄してゐる。咒文咒事の謎を解き、芝居の型を黙示本来の生輝の姿である言葉に還元して、以て言葉と文字で示し申す神の顕示たらしめて世界に開明する時である。

全人類の精神的な至宝であり、凡そ人間たる以上、民族人種を区別なく、誰でもが持つて生まれて来てゐるが故に、人類の共通普遍の財産である三種の神器、言葉神斗蘇通を把持運営する責任者は、

敵くとも過去三千年、祖志の努力と守護によつて原理の連続たる伝統を保持して来た天孫民族日本人である。この時この日本人が躍起して、今日までの若戸隠れの時代のものとしての朝廷あるいは政府とは、その存在と意義と使命を異にする世界の高天原日本の政府、法府、教府を新たに復元建設して、この原理の内容をみずから開示し自覚し、全世界に音ねく教を明して、比類なく優秀なこの道理を以て、劫末滄世の混乱の極に到つてゐる人類社会を大救する時、歴史は此処にその三千年に亘る自然生活(天津菅麻)、生存競争(天津金木)の渾沌が整理されて、人類文明は永劫不変の調和を實現する新しい時代に向つて、輝かしい第一歩を踏み出すこととなる。

「中臣の太祝詞と言ひ被ひ贖ふつとめは誰がためにあれ」と古歌は教へる。「彌陀五劫思惟の本願を／＼案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり(歎異抄)。親鸞は佛の恩寵と、これは対する御恩報謝の決意を此の様に述懐してゐる。これは教尊が女人の爲に假に描いた如來に対する淨信であり、その信心の決定である。此の彌陀の五劫思惟と同じ意味で「我が皇祖皇宗國を肇むる事宏遠に徳を樹つる事深厚なり」と我々は教へられた。この事は抑も一休詠のためであろう。然も我が皇祖皇宗天津日嗣の世界御経論は單なる過去の物語りではない、阿彌陀佛の淨土建設のような方便としての

彼の架空の絵姿ではない。我々は既にその事実の歴史を学び、その過表現を通じて永劫不變の経綸の原理を学んで来た。正代の天皇は毎年に「御贖の儀」を行し、大祓を宣し、或は神宮を祀り、記紀を撰して、此の道の保存と教伝に努めて来られた。これは一体誰のための事であるのか。

もとよりこれは皇運の発展のための事であり、人類の福祉のための事ではある。然しこれではまだ、他の、他人の問題に過ぎない。此の御経綸のもつと、具体的な切実な目標は何であるかと考へた時、この限りなき天津日嗣の恩寵の中に生かされ育まれつつある者が、実は自分自身であることを発見する。此の歴史を通じて原理を通じてその限りなき恩寵に恵まれてゐる自分自身の発見、自覚こそ神道の門に入る端緒であり、神道への奉行の出発である。此の出発点に立つてこそ初めて生きた神道者である。佛教者・キリスト教者の場合、合はたてもまたこれと異なることがない。

扱て、山腰明將氏は次の各項は藝術的な表現であつて、特別な言靈的な意味はないと説いた。だが此処で改めてその言靈的意義を考へて見よう。「科戸の風」は「風の神名は志那都比古神」(古事記)とあるところ、言霊である。頭の中にある志(心)をことごとく(那)都(靈)屋(子)すなはち言葉にすることである、人間の生命

に存する先天的知性としての天名。この天名が精神のひらめき、理念として現はれる真名。この真名(末鳴)が現象として現はれる神名(仮名)と正式の順序階程を経て発せられる言語が科戸の風である。此の科戸の風が「天の八重雲を吹き放つ」と云ふことは「天の八重雲を嚴の千別きに千別きて」と同じ意味であつて、吹き放つは吹き拂ふ意味ではない。人類の正系の言語(言霊)であり、聖書の所謂「神の口より出づる言葉」である科戸の風が天の八重雲である天孫降臨、天津日嗣経綸の原理を表現(吹き)公開(放つ)することである。この時科とある文字を須佐之男命の科と讀み、また建御名方神が天孫に服あふて引退した科野(信濃)と解する時、更に別箇の意味が現はれて来るだろう。

「朝の御務、夕の御務」のぎりを武智時三郎氏は義理と釈こうとした。まことにうがった解釈である。義理は須佐之男命の法である。朝、夕は陰陽であつて、言語と文字と考へてよからう。霧は斬り(桐)すなはち須佐之男命の八拳、九拳劔であり、韓錫の太刀である。この劔による法を施行するには権力をもつて外部から形式的に強制しなければならぬ。「忠君愛國」とか「ブルジョア打倒」とか、実際に命運やノルマを定め、洗脳しなければならぬ。斯の如く外から規制される法が義理である。日本の武士は義理のために切腹した。だがそれでは人間は法の奴隷となつて、本来の自立・自主、

自由がない。そこで「朝風、夕風」が此の困苦しい、不透明な霧の  
ような美理の世界を「吹掃い」、解消する。風は伊吹きてあり、言

霊である。言葉のノルム(規制)は自分自身、すなはち人間自身、  
人類自体から出るものであつて、他から強要されるものではない。  
カントは此の人間の自己規制の性能を「道徳の至上命令」と呼んだ。

「大津辺に居る大船」の船は言葉五十音図のことである。これを

「ノアの方舟」と云ふ。「浮船豊原神」と云ふ。伊勢神皇の御神体

を御舟代と云ふ。佛教では「大乘」と云ふ。衆生を乗せて彼岸に渡

す大船のことである。過去二千年、三千年の向「大津辺」の港にフ

ながれたままであつた此の大衆の法の繋縛、封印を釈放つて、その

上は全人類を乗せて自由に大海原すなはち産靈、創造の世界を航行

することである。

「彼方の繁木」は煩雜な哲学のことである。どれが元であり枝で

あるか区別がつかないから「茶の木林」なども云はれる。「焼鎌

の利鎌」のかまはまた食物を煮る釜であり、言葉力、マである。カ

とマの働らまは言と霊をよく煮つめて言葉(言葉)にまよめ上げる。

鎌を双物とすれば哲学のもつれまアレキサンダーのように断ち切つ

てしまふことであるが、言葉力、マの操作としてならば、そのもつ

れま、主客、霊体の両面から調和、綜合する。

以上四つの操作が大枝の實際であつて、この操作によつて劫末の

世界に充滿して動きが取れなくなつてゐるすべての罪穢と矛盾と錯  
倒の悉くが修被され、淨化されるのである。

高山の末、短山の末より、さくな垂りに落ち、沸つ速川の瀬に

坐す、瀬織津姫と云ふ神、大海原に持ち出でなむ。斯く持出で

往なは、荒塩の塩の八百道の八塩道の、塩の八百念に坐す、煙

間津姫と云ふ神、持ちかか呑みまむ。斯くかか呑みまは、気吹

戸に坐す気吹戸主と云ふ神、根國底國に気吹き放ちてむ、斯く

気吹き放ちては、根國底國に坐す速佐須良姫と云ふ神、持ちま

すらひ失ひてむ。

この一節は大枝執韻の結論である。高山の末はアであり、短山の

末も同じくアである。このアからイ、エ、オ、ウの順序で道が展げ

て行く。「さくな垂り」は咲(裂)く名垂りであろう。その受聖の

アである神の座、天皇の座から現実世界へ言葉摩尼が、世界を経緯

する法として順々に施行されて行く貌を示してゐる。

「沸(瀧)つ速川の瀬」の完全な名を「筑紫の日向の橋の小門の

阿波岐原の上ツ瀬、下ツ瀬、中ツ瀬」(古事記)と云ふ。瀧とは創世

紀及び黙示録にある「生命の河」の流れ道のことである。古事記に

は伊弉那岐大神が阿波岐原に楔被ひ給ふた時「上ツ瀬は瀧速し、下

ツ瀬は瀧遅し、すなはち中ツ瀬に降りかづぎて」と記されてゐる。



古事記に於ける稷は、人間内部に於ける精神法界としての大自然界の全内容である言靈森羅の全局、すなはち大祓祝詞で云ふならば天津言靈に基づいて、その内容を整理し、次でその整理された言靈原理を以て、人類の文明の内容のすべてに生命あらしめる操作である。前段を身削(稷)と云ひ、後段を張望(稷)と云ふ。

この稷後のためには生命の河の上ツ瀨であるア段すなはち感情、下ツ瀨であるイ段すなはち意志、中ツ瀨であるオウエ段すなはち知性の何れに別つて行ふべきか、此の問題である。古事記ではこの瀨は三筋であるが、旧約聖書ではピソン、ギホン、ヒデケル、ユーフラテの四本の流れと記されてある。すなはちイ段を除いたアオウエ四段である。更に佛教や儒教では地水風火空(土水木火金)の五六五行になつてある。稷はこの五六五行のうちオウエの三言靈に別るべきことを示したのが古事記であつて、三智は三命であり、すなはち道である。オは経験智悟性、ウは感覺經驗、エは理性數智である。(十四頁の図参照)

「瀨織津姫」はこの生命の河の瀨を織ることである。言靈アイエオウを縦の次元の体系に取り、千ギミヒリニイシを横の時間空間の变化展開を取つて、この縦横の糸を以て神衣を織る。神衣とは人間の魂のころも(心象)であり、五十音図すなはち魂の原図である。こ

の言靈を組織して魂の衣を作るのが伊邪那岐、美二神の神生みの創造であつて、この岐美兩神を綜合して一者とした神名を伊邪那岐大神と云ふ。すなはち瀨織津姫は布斗麻通の神である伊邪那岐大神である。それはまた前述した朝廷の官職名としては、比礼すなはち五十音図を作成して掲げる「比礼挂くる伴男」に当る。言靈で云へばイである。アなる至純な神性がその内容を現はして、イすなはち布斗麻通を顕示する。アとイの発現が天孫降臨の出発であり、天の岩戸開きの序曲であり、そして天津日嗣の惟神の生命政治の基礎である。アが現はれて下津磐根である言靈イ、布斗麻通を構成することである。

「荒墟の墟の八百道の八墟道」とは人麿の詩的な表現であつて、墟を母音の世界として考へる時、四徳(機)である。古事の岐美二種の創造の過程としてはアオウエの四霊のことである。これまた父額のことと取れば佛教で云ふ機(しほ)と云ふ意味がこれに近い。「悪人正機」などと用ひられてゐる哲学的な契機のことであり、事物の時間空間の変化の節々を示すキシキニヒミイリの八父額のことである。

「その墟の八百会に坐す」神とは現実界の森羅万象が旺盛に生成出現消滅する複雑きままりない「機」(機会)の真只中にあつて、その中から正しい必然と必要を選ぶ出る能力、すなはち所謂理性

獻智のことである。これを「速開津姫」と云ふ。冷靜な秋の如き心

であるから秋津とも書く。明らかであるから明津とも書く。その姿

は眼であつて、特に左の眼である。佛教ではこれを繋者と云ふ。古

事記では「左の眼を流したまふ時に成りませる神」すなはち天照大

御神のことであつて、これが速開津姫の正体である。言葉で云へば

エ(慧)に当る。朝廷の官職としては「手襷掛くる伴男」である。

然らば此の必然と必要を理性が如何にして見出して行くかと云ふ

と、その方法が手襷(手次)であつて、未だ現はれて来ない実相を

襷(宛)の間は未然に捕へて、手の指で数へて、一ニ三四五六七八

九十の数の順序で選び出して行く。手次とは指に指を次ぐことで

ある。「荒塩の塩の八百道、八塩道の塩の八百会」を圖に示すと次

の如くに描けよう。最下段の真中の円が速開津姫(眼)である。



すなはち「手襷掛くる伴男」とは生命の洪範である八咫鏡、天津

本祖詞音圖を掲げて、事物が未だ現実として現はれない以前に判断

把握して、処置指導して行く職務である。たすきはまた田次で、御

菅田の言葉と現実に受継(次)いで行くことである。その御菅田と

現実の關係を圖で表はすと となり、この形をまたたすきと云

ふ。「持ちかか呑みてん」とは呑みこむこと、なるほどと納得する

ことで、獻智の自明、自証、自得の選伏作用を示した言葉である。

「気吹戸」は息吹きの門、すなはち咽喉である。「気吹戸王」と

はその咽喉から発する言語のことで、此処を咽喉佛と云ふ。この佛

の働らきで言語が飛走する貌を矢の飛行に譬へて、その矢を背負つ

て射る者が「鞆負ふ伴男」である。それは手襷掛くる伴男によつて

明かにされた現実界の指導原理を、必要適宜な放訓、法律、命令等

の言語、文字に表はして発布施行する役目であつて、これは古事記

の神名で示せば「右の眼に成りませる神」月讀命に当る。すなはち

言霊才であり、悟性、経験智である。前述の國津神、役目であつて

「高山、短山の五百理」を概念や具體的命令指令に「擧(書)き方

ける」役目である。前述の明治憲法の場合で云ふならば「皇祖皇宗

の後裔に賜したまへる統治の洪範(八咫鏡)を詳述し、時と共に施

行する」役目に当る。月讀命のつきは附の義であつて、月は日(太

陽)に附属してその光りを受けて輝く。天照大御神の獻智に附属し

て、その活らきを言語、文字、概念として放示、施行する者が月讀

命である。

「根の國底の國」はアイエオウの最下段であるウの次元である、

すなはち有(相)の世界、現実界のことである。この世界を自己の

拠点として活動する神を須佐之男命と云ふ。この次元は佛教の所謂

俗諦世間であつて、此処では因果業報が永遠に輪廻流転してゐる。

此の流転の姿と人とき「速佐須良姫」と云ふ。佐須良は「すすらいひ」(漂泊、放浪)である。「曠劫よりこのかた、常に没して出離の期なしと観ず」(教行信証)と親鸞は云つたが、神を知らず、佛に遇はず、天津日嗣の経綸を知らず、世界に対する自己の位置と意義を知らず、みずから輪廻を解脱する力なく、またみずからが輪廻してゐることの自覚なき大衆の境涯が速佐須良姫である。

然らば既にアなる天津日嗣の高御座からイ↓エ↓オと天孫降臨して来た至淳の教訓、律法、政策を如何にして衆生、大衆、人民、國民の上に適用施行して、以て万民をしてその場に、その職に安んせしめるかと云ふと、この時これに用ふる神器を叙(つるぎ)と云ふ。叙は須佐之男命が用ふる法であつて、朝廷の職名としてはすなはち「叙佩く伴男」である。叙(たち、つるぎ)は形而上の意味では判断力であるが、これを現実に用ふる場合、叙は権に通じ、所謂権力である。悪を祓ひ善を勧める指導の實権である。天皇や王から此の権力の行使を命せられた象徴が「節刀」であつて、日本武尊、坂上田村麿、四道將軍等いずれも此の叙の使用を勅命されて、諸國に赴いて軍事と政治の實権を行使した。(三〇頁「燒鎌の利鎌」参照)

天津本祝詞の惟神道に於て此の叙すなはち権力を行使する場合はア、イ、エ、オと次元を降つて次々に真理を展開して来て、愈々最

下段の衆生、民衆に直面する領域に於てである。現在の世界経営法である天津金木のやり方では、最初にウの叙、権力が発動し、権力を持つ者が支配者であり指揮者であつて、ア、ウ、エ、オはすべてその支配下に從属せられてゐる。独り布斗麻通イ言靈はなほ地の底に潜んで、從地涌出の期の至ることを待つてゐる。

天孫降臨、天の岩戸開き、天津日嗣政治の段階はこの根の國産のウの世界まで降つて来た時、此が道の終局である。その初め宇宙の大自然から出發して、その自然を天津菅麻として把握し、文明運営の基礎である布斗麻通を完成し、これを以て仁仁杆(通通管)の道である人間道、人類道を言靈の法範八咫鏡として明かにし、更にその意義を言語、文字、概念に布行して發布し、その政令を大権によつて施行する時惟神道の任務は完了する。速佐須良姫である衆生、民衆はこの道に遵ふことによつて、初めて靈魂と肉体の生活の安定を得て「鼓腹擊壤」の歌を歌ふのである。

この時ウの世界の衆生はエホバの産業に従事する須佐之男の子等であつて、その境涯はなほ輪廻、業縁流転の中のものであり、念の相續と信の決定がないから、或る時期に際して發布された教訓、政令、法律も時が移ると共に、やがて何時の間にかその意義が忘却され、行はれなくなつて、消滅してしまふ。すなはち速佐須良姫が「持ちさすらひ失ひてむ」となるのである。

然しこれによいのであつて、ある一つの道法施業がその終点である衆生の間に実施され、やがて年を経て忘却され消滅する時は、その法の役目が終了した時である。その頃にはまた新たな時宜に應じた計画を天津日嗣の政教府が樹立し、施行して、次々と常に新らしい経緯を行つて行く。大祓祝詞はこの天津日嗣の経験の方法をアイエオウの五行の段階の上に説いてゐるのである。

然らば此の五行の各段に於ける初めから終りに至る横列の時間的変化を如何に処置するか、すなはち實際の具體的な政令を如何に編み出して行くか、この事に関しては更に改めて古事記に就てヒチシキミリイニの八父韻と、夕以下の三十二個の子音の操作を字はなればならない。その五十音言霊全体の操作である古事記の「禊祓」が大祓の完結した法であつて、「大祓祝詞」は禊祓の道に導くための案内であり、手紙きであり、序文序論であることを承知しなければならぬ。「祓戸四柱神」は以上の如く言霊布斗麻通三種の神器を世界経緯の上に運用する次元の順序としての神法である。禊祓の操作全体を含めた意味での大祓祝詞はすなはち神道の結論である。

現代の世界の経営方法は資本主義たると共産主義たるとを問はず、すべて大祓祝詞の根の國底の國であるウ次元に於ける愛憎利害の相對の中に踳躓し、般若心経の顛倒夢想である生死増減輪廻の中をみずから右往左往する者が國家民族を支配してゐる。禊語を借りて云

ふならば「一切の糞塊中に向つて乱咬する底しの蛆虫(ウ字虫)がそのウである現実の権力すなはち金力と武力を以て、神アをも、道義エをも、そして學問科学オをも、その悉くを挙げて自己の地獄の生死流転の劫火の中に捲き込んで行く終局の下剋上の相を呈してゐる。淺季末法とはウ言霊だけが独り離れて、自己と他の四つの言霊との次元的關係を無視して世界を支配してゐる倒逆の時代を云ふ。天界を放逐された天使ルシファア(ウ)が地の支配者サタンとなつた姿である。

此の宇宙の次元に於ける下剋上の姿が天津金木である。然しこの荒涼として悽慘な劫末社会が既に歴史的な終局に到達してゐることをウ言霊看、須佐之男命、大國主命の眷族、エホバの武力と産業の子等に自覚せしめ、その居るべき生命本末の正しい時知位を言向け知らせて、根本的な自己反省をして貰ふ時が来た。地の魔王サタンが再び天に還元して、その四人の兄弟に伍して元の大天使ルシファアの座に戻る時が来た。この爲には三千年、二千年の間人類の前に封印されてゐた、従来人類が用いて来た四つの知性のも一つ先の第五の知性であるイ言霊布斗麻通、一切種智の出現と活動を俟たなければならぬ。

この歴史の必然に對する全世界の要望と渴仰に答へて、天孫民族日本人が大祓祝詞を掲げて起ち上る時がいよいよ来た。葺不合朝中

葉から教へて凡そ五千年の間、天津日嗣天皇がみずから儀式祭典の物と動作の呪事を示し、國民またみずから毎年夏冬二回必ず誦唱して、伝へて来た大被祝詞の予言と指令の意義を全世界に実施する時は今である。

斯く失ひては、天皇が朝廷に位を奉る、官々の人運を始めて、

天の下四方には、今日より始めて、罪と云ふ罪はあらじと、高天原に耳振立て、聞く者と、馬牽き立てて、今年の六月の晦日の夕日の降の大被に、被ひ給ひ清め給ひ事と、諸國に召せと宣る。四國の卜部等、大川道に持ち退りて被ひ却れと宣る。

親王、諸王、百官、四伴男が各自の魂の高天原に耳振り立てて聞かねばならぬものとは布斗麻通の曼荼羅である五十音図、天の班馬（まだらこま）である。大被祝詞の意義は天の八重雲である班馬の構成に始まり、その原理の具体的、政治経済的實施に終る。この「天孫降臨」すなはち「天の岩戸閉じ」の真諦と、歴史の時期が廻つて来た時、高天原日本から全世界に向つて發布し実施せよと云ふ、そのかみの天津日嗣の勅令がすなはち大被祝詞である。

三種の神器すなはち言靈布斗麻通の固床夫殿癢止以前の太古神代或は上古までに行はれた大被は、その天班馬である五十音言靈とその被の場、祭祀式典の場に於て「アイエオウ（ん）、タチテトツ

（ん）、カキケコク（ん）……」と朗唱して、百官諸人に聞かせたことを竹内古文献が伝へてゐる。すなはち實際に五十音天の班馬をその場に牽き立てて来て、耳振り立てて傾聴せしめたのであつた。

然し過去二千年間の像法末法の時代に及んでからは、今日に至るまでその五十音図を唱へることが癢止されて、この勅令の意義を現在の被祝詞に見る範囲内の呪文呪示の表面だけの、言靈隠没、天の岩戸隠れの状態で我々は伝承して来た。爾来毎年六月、十二月二回宮中より發布され、宮中を始め諸國に繰返し施行された大被の式典は、此の呪文呪示の形式の保存伝承のためのものだけに過ぎなくなつた。今日までほそれでよかつたのであるが、然し今日以後はそれではも早や世界に通用しない。この様な呪事の保存伝承のため祭典儀式としての、猿芝居の大被ではなく、人類文明の最後の最高の整理としての實際の大被は天津日嗣の経論の正史的な時期が熟して、封印されてゐた天の岩戸の中から言靈布斗麻通が出現することによつて、初めて實際に施行されるのである。

大被祝詞の古き謎が、その意義が我等の手によつて斯く明瞭に収まり得られたことは、まことに二千年來の盛事であつて、同時にこの事は予定され指示されてゐる経論の時期が既に到つたことの証明である。

茲に遠く四千年に及ぶ歲月と、先祖代々我等日本民族が継承、保

存、誦唱し續けて来たこの天津日嗣の遺訓、遺詔を答々服膺し、その遺訓の實質である人類本具先天の知性を開顯し、正像末三千年の劫盡きて大火に焼かれつつある世界文明を大救し、救済するため高天原の天孫民族が神代ながらの本束の神性に還へつて、甦起する時が来た。(昭和四十五年八月十八日)

(本書の印刷は著者自筆のオフセット版)

### 第三文明會發行書

古事記解義言靈百種 86頁 ①共 八五〇円

神道は二千年間天の磐戸に隠れて来た。と云ふ事はその原理が悉く咒文咒事の形、すなはち聖書の黙示録と同形式の黙示の形で伝へられて、原理の实体である人間の第五の知性、言靈五十音布斗麻通、三種の神番が顕はに示されて来た。た云ふことである。徳川時代の訓古学以来、学者はその咒文を咒文の條に添んで来て、これが咒文であることに気付かなかつた故に、叙とうとすればする程、疑問は疑問を生んで結局神道不可解の結果に陥つて来る。

天津日嗣の経緯に予定された三千年の歴史が経過し、世界の科学文明が発達し、他面精神文明の混乱の極に陥つた時、これ王解決する爲に用意されて置かれた法である神道の本質が世界に出現する時機が到来した。明治天皇、昭憲皇太后の明治朝廷に於ける「言の葉の誠の道」(言靈学)の御研究の流れを汲んで、完備された神道の黙示書である「古事記」の基本である「天之御中主神」より「速速須佐之男命」に至る合計百種の黙示咒示の謎の封印を解いて、本体である五十個の言靈と、その操作法五十個、合計百種の原理を開顯し、これを従来の西洋哲学、佛教、キリスト教、儒教等の理論を用ひて概念的に解釈し、同時にそれ等の宗教の奥義を公開したものの

ものが本書である。

本書を学ばずして神道を結ぶことはすべからず、本書の上に立たずして神道を体得実践することは不可能である。

「大祓禊詞解義」と併せて讀みかかれんことをお勧めする。

第三文明への通路 新書版 ①共 三〇〇円

天孫降臨以来今日に至るまで、過去一万年にわたる天津日嗣の世尊経論の経過経緯を説明し、人類文明が趨むべき必然の方向を明かにし、世界緊急の当否を示した、天津日嗣の経論に則った指令書である。

KOTOTAMA, the principle of 100 deities. 十〇〇円

The passage to the 3rd. civilization. 五〇〇円

Zion and Nippon. 三〇〇円

最後の審判 Bの原冊子 五〇円

随想及び小論文集(勝手版冊子取揃) 一〇〇〇円

第三文明会会誌 一〇五至五九号合冊 一〇〇〇円

(昭和三十四年十月 勝手版冊子発行)

昭和四十五年九月 日 改訂再版

著者 小笠原孝次

發行所 第三文明會

皇學研究所

東京都渋谷区幡ヶ谷二一六一一二

第三吉井社 電話(三七六)六六五五